

・通史編

1 長後地区の地理

1-1 長後地区の位置

藤沢市は神奈川県ほぼ中央に位置し、北部は相模野台地、西は高座丘陵、東は村岡丘陵および片瀬丘陵と高さがあり、台地の崖下から相模湾まで続く南部平地には、湘南砂丘地帯が広がっている。このように市の地形は丘陵、台地、平地に大別される。

地球形成の歴史から見ると、その成り立ちはごく新しく、市内で見られる一番古い地層は、約 2000 万年前に海底火山の噴出物が厚く堆積してできた葉山層群である。このとき県内全域はほとんど海中にあった。

約 500 万年前、フィリピン海プレート上の丹沢山地が南から本州に衝突。地殻変動によって葉山層群などが隆起した。約 200 万年前には氷河期がおとずれ、気候変動により平野部が拡張と収縮をくり返した。

約 15 万年前には下末吉海進による堆積で礫層ができ、約 2 万年前の最後の氷河期には海面が現在の位置より約 100m 低くなり、市内は全て陸地化した。

約 6000 年前の洪積世になると気候は温暖になり、海面は今より 7~8m 高くなり、およそ 1500 年前頃、現在の海岸線となった。

長後地区は藤沢市の北部に位置し、北から南へ流れる引地川と境川にはさまれた台地と、境川沿いの低地平野、同じく引地川の低地平野と、そこから続く西側斜面からなっている。

現在の長後地区は、西は綾瀬市、北は大和市、東は横浜市泉区と接している。

1-2 台地の成り立ち

長後地区は、台地と低地平野（引地川と境川の、両川にそって広がる平野部）上にある。台地は相模野台地（相模面）と呼ばれ、現在とは流れ方の異なる古い相模川の氾濫原が扇状地となり、さらにそこが隆起してできた。長後地区はこの台地の北東端の縁にある。

約 40 万年前、相模川は現在とは違い、東に向かって流れていた。多摩丘陵には御殿峠礫層という丹沢の石の層があり、このことから相模川は、多摩川と合流して東京湾に流れ込んでいたとみられる。やがて地殻変動が起こり、三浦半島から横浜、多摩に続く丘陵が高くなると、相模川は流れの方向を変えて、相模湾に注ぐようになった。また、平塚の花水川河口付近を中心とする相模造盆地運動という地殻変動が起こって土地が低くなり、さらに西へ西へと流れを移動させていった。

約 13 万年前、多摩川から離れた相模川は、下末吉海進と呼ばれる世界的に暖かい時代に丹沢から大量の石を運び、堆積させ、相模原市緑区周辺から江ノ島まで広がる扇状地を形成した。この石の層を相模野礫層という。

相模川によって造られた広大な扇状地は、約6万年前までに隆起し、相模野台地（相模原面）となり、さらに箱根火山や富士山の噴火による火山灰が堆積してローム層を形成し、高さを増していった。

相模川は、現在の境川の流路を通っていた時期もあったが、相模造盆地運動によりさらに西へと流れを変え、引地川、目久尻川へと移動して、約4万年前に現在の位置になった。

境川、引地川、目久尻川は、小さい川ながら谷底平野の幅が広いのはこのため、これらの川は、かつての大河の面影を残すため「名残川」とも呼ばれている。

1-3 河川

市内を流れる主な川は、横浜市と藤沢市の境を流れる境川（支流：白旗川、滝川、柏尾川）、市のほぼ中央を流れる引地川（支流：一色川、小糸川）、海老名市と藤沢市の境を流れる目久尻（めくじり）川、茅ヶ崎市と藤沢市の境を流れる小出（こいで）川などがある。その中で、境川と引地川が長後地区を流れている。

1-3-1 境川：

東京都町田市の大池沢を水源とする、全長 52.14 km の 2 級河川。県内 2 位の長さで、柏尾川、和泉川など 8 つの支流を持っている。

境川の名は、上流部が武蔵野の国と相模野の国の境を流れることに由来しており、かつては高座川と呼ばれていたが、文禄 3 年（1594 年）の検地で、この川を相模と武蔵の境に定めたことから境川と改められた。

現在の町田市、相模原市、大和市の都県境をなし、長後地区では藤沢市と横浜市の境を流れている。下流は片瀬川とも呼ばれ、江ノ島の前で相模湾に流れ込んでいる。

中流では、この川の水を引いて水田に利用しており、長後地区にも穀倉地帯が広がっている。しかし、かつては激しく蛇行していたため、たびたび洪水を引き起こし、長後地域では昭和 30 年代後半あたりから河川改修が行われた。高鎌橋のすぐ下流には高飯堰があり、夏には堰を閉じて水田に水を供給している。

川の堤防にそっては、通称「境川サイクリングロード」、正式名称「神奈川県道 451 号藤沢大和自転車道線」が通っており、藤沢市の鵜沼海岸から大和市の下鶴間に至る一般県道として認定されている。整備済み区間の大部分は境川に沿っているが、一部引地川も通過する。

両岸の植生は貧しく、セイタカアワダチソウ、オオアレチノギク、オオブタクサなどの外来種が多い。下流の高飯橋までの両岸では、春にはシロバナタンポポ、セイヨウタンポポ、カントウタンポポの三種類が見られる。夏は、クズ、カナムグラ、アレチウリなどの蔓性植物が、秋にはコセンダングサ、アキノノゲシ、オギなどが目立つ。また冬から春先にかけて、カワセミ、コサギ、ゴイサギ、カワウ、カモ、セキレイ、ジョウビタキ、ツグミ、ホオジロ、イソシギなどの野鳥を観察することができる。

1-3-2 引地川：

引地川は厚木基地のすぐ北側、大和市上草柳（「和泉の森公園」内）を源流として、相模台地を浸食しながら谷底平野を形成し、鵜沼海岸で相模湾に注ぐ全長21.3kmで、水の乏しい洪積台地を流れる河川であったため、貴重な水の得られるこの川沿いには、古くから集落が形成されてきた。明治時代は綾瀬川とも呼ばれ、水が澄み、ウナギ、ナマズ、コイが多かった。水量の変化も少なく、水田の灌漑用水に適し、水車の利用もみられた。

上流部の神奈川県道45号丸子中山茅ヶ崎線までの4.46kmは大和市管理の準用河川区間、それより下流は二級河川として神奈川県管理となっている。主な支流に蓼川（たてかわ）・不動川・一色川・小糸川がある。

中流部の谷底平野には水田地帯があり、農業用水の取水のための施設として「長後堰」「中村堰」「石川堰」が設けられている。

近年、工場建設や宅地化が進み、川の汚染や冠水などの問題を生じたため、河川改修が進められ、下土棚遊水池などが整備されている。

河川名の由来には諸説あるが、台地からの出口に当たる藤沢市稲荷付近で、砂丘を断ち切って河道を付けかえたことによるという説が有力である。場所によって長後川、大庭川、清水川、堀川などの名称で呼ばれていた。

1-4 小川や淵（縁）と呼ばれる地域

長後地区には、境川や引地川のほかに、小川と称される小さな川がある。また、縁、淵という名のつく地名も残っているが、戦後の耕地整理、河川改修などで形を変え、忘れられつつある。

- ・新川… 諏訪神社脇の小川を七ツ木の中川に合流させた小川。
- ・谷戸川… 下土棚の引地川沿いから北東にのびていた谷戸にあった小川で、源流は三方が小高くなった摺鉢山という窪地の湿地。
- ・悪水縁… 七ツ木神社の東側の崖下の田。悪水とは、田で使い終わった水、あるいは用水に適さない水のことをさす。
- ・どぶ田… 同じく用水に適さない水のたまる田で、湘南台6丁目の上原公園の北側、境川がすぐ近くを流れる三角形の田。
- ・大川淵… どぶ田のすぐ北側、境川沿いの田につけられていた地名で、かつてはそこにも縁（或いは淵）があった。

1-5 山と名のつく小高い場所

- ・権現山… バス亭「大下」近くにあった雑木林。
- ・土山… 権現山の近く、小字夏刈の小高い台地で、清水が湧き、子どもの遊場になっていたが、現在は整地されている。
- ・西光山… 下土棚市民の家の近くで、移転する前の西光山善然寺があった。
- ・御釈迦山… 小字大持にあって、大きな釈迦像が置かれていた。この山を開墾したさい、多数の人骨が出土した。現在はいすゞ工場内。

- ・石塔山…富士見台小学校付近にあって、下土棚で最も高い場所。下土棚の地頭であった竹尾氏の墓地があったが、のちに善然寺に移された。
- ・代官山（兎山）…総合高校用地の一角。先土器時代の狩猟用具、古墳時代末期の横穴式墳墓など数多くの遺跡物が出土している。
- ・谷戸山…高倉の大山道沿いにあった、谷戸の上の松林。

1-6 道（かつての古道）

1-6-1 滝山街道（八王子道）：

藤沢と八王子を結ぶ道。足利時代に扇ヶ谷上杉家の家臣、滝山入道が八王子の西北に滝山城を構え、主君上杉氏が大庭に築城したため、この二つの城を行き来するために使われた。戦国時代には、滝山城と玉縄城を行き来するための道であった。台地の上を通るため、「八里橋なし」といわれるように、川や谷を横切ることがないことで知られている。

「新編相模国風土記稿」によれば、江戸時代には藤沢宿～亀井野～長後～下鶴間～原町田と継立場（乗り換え用の馬や人夫などが用意される場所）が設けられた。亀井野の継立場は、雲昌寺のすぐ北、あるいは俣野原にあったとされるが、長後に関しては資料がない。地域の中心地におかれることが多いことから、推測では、現在の四つ角あたりにあったのではないかと思われる。

1-6-2 大山道（柏尾通り大山道）

大山道や大山街道と呼ばれている道が、神奈川県内には幾筋かある。その中で、長後地区を通るものは「柏尾通り大山道」と呼ばれ、東海道の柏尾を起点とすることから名付けられた。

大山道は、羽根澤屋の地点で滝山街道と交わり、四つ角（角屋があった所）で分かれる。この間で宿場が形成され、「藪鼻宿」と呼ばれて、大山詣での人々に利用された。戸塚方面から来た参詣者は、羽根澤屋、古満屋、角屋などの旅籠に泊まって大山を目ざした。「大山街道飛ぶ鳥は、羽根が16、目がひとつ」という手まり唄が広く歌われたことなどから、当時のにぎわいを偲ぶことができる。横浜や東京東南部以外に、千葉方面から舟で海を渡って神奈川の港や杉田あたりで上陸した人々もあり、武相国境を越えて柏尾へと通り抜けることも多かったようだ。

現在、戸塚から長後へは高鎌橋を通過するが、かつての大山道では、千束から飯田に通じる唯一の橋として、高鎌橋より150mほど上流にあった千束橋（丸木橋だった）を渡った。

1-6-3 星の谷道

この道は、杉本寺、岩殿観音、田代観音、長谷観音など鎌倉周辺の札所と、座間市の星の谷観音を結ぶもので、鎌倉から遊行寺を通り、円行大橋を渡って北上、長後地区では引地川の西側を通り、下土棚の諏訪棚付近を通る。小字諏訪ノ

棚には、「大山道 左大山道 右ほしのや道」と刻まれた道標がある。

「星の谷観音」（星谷寺）は、鎌倉市の杉本寺を一番札所とする、関東各地に点在する坂東三十三観音札所の第八番札所にあたる。鎌倉時代頃から札所をめぐる巡礼が行われるようになったが、庶民の間で盛んになったのは江戸時代中期。札所めぐりの案内書、沙門亮盛の『坂東霊場記』、朝輝房渴水子著の『坂東順礼行程記』などが出版された。

1-6-4 塩の道（＊）

江戸中期から明治初期にかけて、現在の横浜市金沢区の海岸で製造されていた塩を、東京都八王子市まで運ぶ「塩の道」と呼ばれる道があった。「塩付道」、あるいは馬の背中に塩を積んだため「塩積道」ともいわれ、いずれも「しおつけみち」と読んだ。金沢・六浦海岸から鎌倉を経て、俣野の金沢橋を渡り、わずかな距離、滝山街道を通過し、下土棚、長後、福田、本蓼川、厚木基地、桜森、橋本、八王子と続いていた。

明治の中頃になると、相模川を使った水上交通や鉄道の発達とともに、塩を運ぶ道としては使われなくなったが、一部は、その後の生糸など絹織物関係の運搬道として重なり、現在も幹線道路として痕跡をとどめている。

なお、鵠沼や腰越でも塩が製造され、そこを起点とする塩の道もあったとする説もあるが、資料の確認はされていない。

参考文献：『図説 ふじさわの歴史』写真集図説集刊行会 藤沢市（藤沢市文書館）1991 年刊

『ふじさわの大地 一人々の暮らしと自然』藤沢の自然 編集委員会
藤沢市教育文化センター 2002 年刊

『藤沢の地名』日本地名研究所編 藤沢市発行 1987 年刊

『新編相模風土記稿 第三巻』雄山閣

（＊）『神奈川新聞』1986年1月22日記事「潮の道 綾瀬市内の経路が判明」

担当：池田純子

2 先土器時代（旧石器時代）

2-1 赤土（ローム層）と遺跡

先土器時代は地質学で更新世、一般的な言葉では氷河期時代と呼ばれる時代に属する。三万年前から二万一千年前の段階では、石斧、初歩的なナイフ形石器、台形様石器などが主体であるが、この時代の文化の特徴として地域差が小さいことがあげられる。北海道から九州まで類似の石器をもと文化が広がっていたのである。石器の中でもとくに注目されるのが石斧で、数も多く、しばしば先を磨いて刃をつけている。これは世界で最も古い磨製石器である。神奈川県内では、現在までのところ、この時代の遺跡が200ヶ所以上知られ、その八割以上が相模野台地に集中している。そして、藤沢は、この台地の南端に位置している。藤沢市内では、この時代の遺跡は、昭和38年（1963）、稲荷台地遺跡が最初に発見され、現在までのところ、24ヶ所が確認されている。これらの遺跡は、市域を南下する境川や引地川、その支流の不動川（六会）、一色川（石川）、小糸川（大庭）、さらに北西部の小出川などの河川流域の台地上に分布している。そして、台地上でも河川に近い台地縁辺部に立地し、河川から離れた内陸部には、見当たらない。長後地域には「代官山遺跡」がある。代官山遺跡では、4609点の石器、119点の礫のほか、101ヶ所の石器群や68ヶ所の礫群が検出され、二万数千年から一万二千年前の縄文時代草創期にわたる間に、10枚の生活面が認められている。また、総重量105、5kgを量る石器や礫が出土している。これらの石材は、黒曜石を筆頭に、チャート、粘板石、凝灰岩、安山岩、砂岩等9種類に及んでいる。そして、それらの大半は遺跡近くの河原や礫層の露頭から採集されたものであるが、なかには黒曜石のように箱根・信州・神津島のものや他に東北地方などの遠隔地にその原石が求められるものも含まれている。「用田鳥居前遺跡」（県道22号用田バイパス）は約二万五千年から一万六千年前の地層から石器や炭化した木材が出土した。出土した石器が約2km離れた綾瀬市の遺跡出土の石器と接合されるものであり、全国的にも極めて稀なものである。通常は離れていても数100mである。

2-2 長後地域の主な先土器時代の遺跡

・代官山遺跡からは、関東ローム層中の立川ローム層から約一万数千年の間にわたる旧石器時代の9枚の文化層が確認された。

3 縄文時代

先土器時代から縄文時代への移行は、土器の出現を指標にして分けられている。日本における土器の出現は、氷河期時代の最後の時期にあたり、その頃地球は大きな振幅で寒暖の変化を繰り返しながら温暖化の方向へ向かっていた。このような環境の中で縄文文化の胎動がはじまり、やがて本格的な温暖気候の到来とともに、名実ともに縄文時代の特徴をそなえた文化が確立して日本列島全体に広がっていった。縄文文化は、日本列島の完新世（氷河期時代よりあとの気候が現在とほぼ同じになった時期）の自然環境に適した文化となった。縄文時代は一万年を超える長い時代なので、その間の文化社会の変化は非常に大きく、この期間は大きく6つに分けられている（草創期、早期、前期、中期、後期、晩期）が、土器型式を基準にしたこの分け方は、各時代の継続年数が均等でなく、古い時期ほど長い傾向がある。

3 - 1 縄文時代の6つの時期

- ・ 草創期（12,000年前～9,500年前）
- ・ 早期（9,500年前～6,000年前）
- ・ 前期（6,000年前～5,000年前）
- ・ 中期（5,000年前～4,000年前）
- ・ 後期（4,000年前～3,000年前）
- ・ 晩期（3,000年前～AD）

3 - 2 縄文時代の自然環境

- ・ 縄文時代前期に氷河期が終わり、海面が上昇した。

藤沢市域南部の低地部は海の中、ただし以降は徐々に海面が低下し、陸地化する。

3 - 3 縄文時代の藤沢市域遺跡の分布状況

- ・ 遺跡の立地は、概ね河川流域に集中する。これらは、前の先土器時代と同様であるが、その分布は、広汎にわたっている。江の島をはじめ、標高30～40mの台地上はもとより、標高20m以下の低台地や遠藤から用田にかけて

の丘陵地、さらに川名や石上などの低地（沖積地）にも、極一部ではあるが認められ、市内ほぼ全域に広がりが見られる。しかし、これらは、草創期から晩期までの約一万年前という長い間のけっかであり、人々の生活が同時期にしかも市内全域に繰り広げられたわけではない。時期別の内訳をみると、不明なものを除き、草創期40ヶ所、早期59ヶ所、前期50ヶ所、中期99ヶ所、後期70ヶ所、晩期5ヶ所で、前の後期に比べ激減している。また、時期不明が36ヶ所ある。

3-4 縄文時代の特徴

- ・土器（縄文土器）の登場によって人々は食べ物を煮炊きするようになる。
- ・竪穴住居の出現し、集落が営まれる。
- ・信仰→埋葬遺構（土墳墓）、祭祀遺物（注口土器・土偶）が確認される。収穫や多産の祈りや悪霊退治などの呪いがおこなわれたりもした。

3-5 長後地域の主な縄文時代の遺跡

- ・代官山遺跡から出土した「隆起線文土器」は、縄文土器の中でも、最も古い草創期に属するものの一つである。器表面には、縄文をもたず、口縁部に5段の平行する紐状の細隆起線文が施されている。
- ・高倉枯藁遺跡からは陥し穴、隆起線文土器、石器、有舌尖頭器、磨石などが出土している。
- ・高倉滝の上遺跡からは陥し穴、槍先形尖頭器、石鏃、石斧、撚文土器などが出土している。
- ・高倉遺跡からは後期の土器片が出土された。
- ・下土棚諏訪ノ棚遺跡

4 弥生時代

およそ2,300年前、日本列島に住む人々の生活に大きな変化をもたらされる。それは、中国大陸や朝鮮半島などから渡来した稲づくりの開始で、弥生時代と呼ばれる時代の始まりを示す。ただし、縄文時代にも一定の農耕活動があったこと、弥生時代のいろいろな変革は、日本列島全域で一斉に進行したものではないこと、弥生時代には世界史的に文明・都市・国家が成立する青銅器・鉄器時代

の技術も出現することなどが、その文化の評価を難しくしている。現在も弥生時代の各段階の暦年代をどう考えるか、またどの段階を弥生時代の始まりと終わりと考えるかについていろいろな意見があるが、土器の特徴などから前期・中期・後期の3期に区分される。

4－1 弥生時代の3つの時期

- ・前期（紀元前 500 年前後）朝鮮系青銅器の本格採用。
- ・中期（紀元前 100 年前後）中国鏡の本格使用。
- ・後期（紀元後 300 年前後）前方後円墳の卓越。

4－2 弥生時代の自然環境

縄文時代から引き続き、藤沢南部の陸地化が進む。

4－3 弥生時代の藤沢市域遺跡の分布

今までのところ弥生時代の遺跡は、市内で約 60ヶ所が確認されている。これらの遺跡を時期別に見ると、不明のものを除くと、中期が10ヶ所、後期が40ヶ所で、前期に属するものはない。いずれも中期以降のもので、特に後期に入っからの急激な増加が示される。遺跡の立地を見ると、縄文時代にひきつづき生活拠点の場所として選ばれたのは、台地上である。しかし、市内ほぼ全域に広がりが示された縄文時代の遺跡の分布とは異なり、限定された地域に分布が見られる。それは、市域北西部の目久尻川や小出川流域および境川流域では散在的ではあるが、引地川とその支流の小糸川の合流する大庭の台地やその東側に位置する稲荷の台地さらに境川と柏尾川の合流する大鋸や川名の台地や低台地上に濃密な分布が示されることである。

4－4 弥生時代の特徴

- ・縄文土器から弥生土器へ。→土器の生産技術の向上。多様な器種の登場。
- ・稲作の開始。
- ・鉄製品の登場。
- ・環濠集落の登場。→集団による戦闘の開始。

4－5 長後地域の主な弥生時代の遺跡

- ・長後天神添遺跡

宅地造成時に発掘調査し、弥生時代後期の住宅跡や弥生土器の確認。

- ・高倉滝の上遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構としては、竪穴住居 3 3 軒と溝状遺構 1 条が発見されている。

- ・下土棚諏訪ノ棚遺跡 竪穴住居跡 5 軒

- ・下土棚夏刈東遺跡 竪穴住居跡 1 0 軒

5 古墳時代

古墳時代とは、地表に土を盛って丘をつくり、その中に埋葬施設を設けた古墳が全国各地で盛んに築かれた時代で、考古学上の時代区分としてこの名称が使われている。古墳時代は、前期、中期、後期の 3 時期に区分されている。前期の遺跡の中で代表的なものとして、高倉に所在する高倉滝ノ上遺跡、大庭の西部 2 2 3 地点遺跡、稲荷の池の辺遺跡などがあげられる。中期になると遺跡の数は激減する。代表的な遺跡としては、本入遺跡、大庭の 2 0 6 地点遺跡などが知られる。後期の遺跡で代表的なものは、高倉に所在する高倉滝ノ上遺跡、稲荷の池の辺遺跡、川名の清水遺跡、片瀬の大源太遺跡などがあげられる。藤沢市内では、古墳とは好対照に、古墳よりやや遅れた時期に出現し、一時期これとほぼ時を同じくして築かれた横穴墓が数多く存在する。横穴墓とは、崖や丘陵の斜面を利用して横に洞穴を掘り込み、その中に遺体を安置した施設で、5 世紀後半に北九州周辺で発生し、次第に東へ東へと伝わり、その後およそ 8 世紀初頭にかけてまでに、全国各地で盛んに築かれた当時の墓の一種類である。藤沢市内でも横穴墓は数多く確認されており、藤沢市東南部の片瀬丘陵の斜面、引地川流域の大庭折戸、円行桐ヶ谷、長後代官山などにその存在が認められる。

5－1 古墳時代の 3 つの時期

- ・前期（約 1,800 年～1,600 年前）近年の調査によってその数が増加し、市内北部にも遺跡の存在が明らかになる。
- ・中期（約 1,600 年～1,500 年前）遺跡の数は激減する。
- ・後期（約 1,500 年～1,300 年前）近年の調査によってその数が増加する。

5－2 古墳時代の藤沢市域の自然環境

- ・弥生時代から引き続き、南部の陸地化が進む。→集落が確認されるようになる。

- ・弥生時代後期から古墳時代前期にかけ、大地震の痕跡を市内の各地で検出。

5－3 古墳時代の藤沢市域遺跡の分布

- ・前期までの遺跡は弥生時代後期とほぼ同じ。

- ・中期は現在のところ、6ヶ所の遺跡しか確認されていない。

- ・後期になると約30ヶ所の遺跡の確認。→中期に人が生活できなくなかった何かしらの理由があるか。

5－4 古墳時代の藤沢市域特徴

- ・土師器と須恵器の登場。

土師器：焼成方法は前時代の流れをひく、素焼きの土器。器形は定型化する。

須恵器：大陸より新たに伝わった窯で焼く硬質の土器。

- ・カマドの使用。←中期後半から家屋に造り付けのカマドが設置される。

- ・古墳・横穴墓が造立される。←藤沢市内では圧倒的に横穴墓が多い。

横穴墓：崖の斜面部をトンネル状に掘り進め、造られた埋葬施設。

5－5 長後地域の主な古墳時代の遺跡

- ・高倉滝ノ上遺跡：弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期

県営藤沢滝ノ上団地建設時に発掘調査。竪穴住居8軒が発見。

カマドの使用状況を知ることができる住居跡を発見。

主な遺物は、土師器（坏、高坏、鉢、壺、甕、甗）・刀子・勾玉・砥石で、主な遺構は、住居跡である。

- ・代官山遺跡：古墳時代後期

代官山横穴墓群からは、2回の調査によって合計18基の横穴墓が発見されている。横穴墓群は大きく5つの時期に分類される。

第Ⅰ期：横穴墓が築かれる以前の時期で、横穴墓背後の丘陵上から円墳の痕跡が発見された。遺体を葬った施設はすでに破壊されて残っていなかったが、古墳

をめぐる濠からは6世紀後半代の須恵器が出土している。

第Ⅱ期：丘陵の南側斜面に横穴墓が築かれはじめた時期で、内部施設の特徴として、玄室と羨道の区分が明らかで、造付石棺が設けられていることである。

第Ⅲ期：第Ⅱ期の横穴墓の間をぬうように、南側斜面を中心に横穴墓が築かれた時期で、内部施設がさまざまに変化し、玄室と羨道の区分がやや明らかでなくなる。背後の丘陵から唯一発見された竪穴住居跡もこの時期にあたる。

第Ⅳ期：南側斜面に横穴墓を築く場所がなくなり、東側斜面に築かれるようになった時期で、内部施設に大きな変化が現れ、玄室と羨道の区分がまったくなくなる。遺体を安置する部分を1 m以上もの高さに築いた高棺座が出現する。

第Ⅴ期：横穴墓が築かれた最終末期にあたり、すべてが東側斜面に築かれる。内部施設に大きな変化はないが、規模がやや小さくなる。

これらの横穴墓が、いつ頃築かれたということについては、横穴墓の内部の形と付属施設、そして出土した須恵器の微妙な形の違いなどから、おおよそ年代を推理することが可能である。第Ⅱ期は6世紀終末から7世紀初頭にかけて、第Ⅲ期は7世紀中頃から後半にかけて、そして第Ⅴ期は7世紀後半から終末にかけて築かれたと考えられる。明治35年（1902）刊行の『長後小誌』にも記述がみえる。県内出土の須恵器の生産地が判明した研究史に残る遺跡である。



代官山遺跡

- ・高倉枯藪遺跡

古代の竪穴住居址、掘立柱建物址、溝状遺構などが出土している。

- ・長後上ノ原遺跡

土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、鉄鏃、鎌、鉄製紡錘車、分銅、瓦、などや、遺構の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝状遺構が出土している。

- ・下土棚諏訪ノ棚遺跡 竪穴住居跡4軒、土坑1基

- ・下土棚夏刈東遺跡 円墳2基、鉄製農具（鋤か鍬の先と見られる）

5－6 古墳の終末

北と南をのぞく日本列島では、3世紀の半ば過ぎから大規模な前方後円墳をはじめとする古墳が数多く営まれる。こうした大規模な前方後円墳は、後に畿内と呼ばれる近畿中央部の政治勢力を中心に形成された広域の政治連合、すなわ

ち、ヤマト政権に加わっていた各地の首長たちが、その連合での身分秩序に応じて大小さまざまな造営したものと考えられる。この政治連合も、5世紀後半以降は、畿内以外の地域ではあまり大きな古墳はみられなくなり、畿内勢力の地方に対する支配が強化され、連合の質が大きく変化する。それでもなお6世紀末頃までは、各地の首長たちも前方後円墳を営み、首長連合としての性格は形骸化しつつもなお保たれていた。ところが、この日本列島の古墳を特徴づけた前方後円墳の造立は、畿内地方など西日本では6世紀末をもって終息を迎える。関東地方などでも6世紀代に各地で数多く造られていた前方後円墳が一斉に造られなくなり、それ以降はごく一部の地域で、大型の方墳ないし円墳の造営が継続するに過ぎなくなる。また、畿内の支配層の古墳のあり方をみると、6世紀末ないし7世紀初頭の前方後円墳の造営停止、7世紀半ばにおける大王墓の八角墳化、さらに7世紀の第3四半期の終わり頃の豪族層の古墳造営の終息をもって、その終末を迎えることになる。このように、古墳の終末の過程は、とりもなおさず大王(天皇)を中心とする、中央集権的な律令制古代国家の形成過程と表裏の関係にあることが知られる。

長後にある代官山の横穴墓は、明治35年(1902)、『長後小誌』に、「穴居の跡 昔時兎山通称向山にあり今尚存す入口二尺四方の中は疊四五疊を敷くべし内に一段ありて広さ一疊を敷くべく赤質の土壤にして掘りし道具は尤も鋭利なる刃物の如し崖の中腹雑木繁茂の間にあり明治二十年諸節稼七井上今三郎なるものが発見せしものにして発見の節は遺骨尚存せり然とも如何なるものの住居せしやの年数経過は詳ならざるなり其他近傍に数個の穴あれ共其の形状皆異なるなり」と書かれている。

6 飛鳥時代・白鳳時代・奈良時代

6-1 飛鳥時代

古墳時代中期以降、ヤマト王権の地方支配は徐々に強まり、古墳時代後期には国造制と呼ばれる支配制度が施行されることになる。王権に服属した地方豪族に国造という官職を与え、従来の土地・人民に対する支配権を保証するようになった。相模地方には、『国造本紀』に登場する師長国造、相武国造に加えて、鎌倉別という国造と同等クラスの在地首長がいた。相武国造は相模川両岸の相模平野全域を広範に支配し、その拠点には丹沢山塊東南麓にあった。藤沢市域では、若尾山古墳、スクモ塚古墳、大源太古墳群といった中期古墳に続いて、6世紀前半には江の島の辺津宮神社古墳が築かれることから、藤沢市南端部は「水門」

を管理し水上交通の権益にかかわる地域首長の拠点が置かれた重要地域であったと想定される。

6－2 白鳳時代

藤沢市がある高座郡が初めて歴史に現れるのは、『日本書紀』の天武天皇4年(675)10月18日条の「この日、相模国高倉郡の女人、三男を生む」という三つ子出産の記事である。高座郡は『和名類聚抄』に「多加久良」と訓まれておりタカクラと読んでいたとわかる。天武天皇4年条は同時に相模国の初見でもある。律令体制は、645年の大化の改新以降、天武期にその制度が整っていく。その過程で相模国も律令制の支配が浸透していった。国境が定まり、評制が敷かれたのもこの時期のことである。当初の行政制度は国評制であり、これは大宝2年(702)の大宝律令施行に伴い国郡制になるまで続いた。したがって、天武天皇4年条の「高倉郡」は正しくは「高倉評」であるが、『日本書紀』は成立が養老4年(720)であるから、当時の国郡制に合わせ「評」を「郡」に書きなおしている。国郡制では郡の下に里が置かれ、国一郡一里(郡里制という)がその行政単位となる。これは、霊亀元年(715)から天平12年(740)の間は、国一郡一郷一里に変更されている。これを郷里制という。郷里制では郷の下に、一郷につき二、三の里がおかれていたが、これは従来の里を郷に名称変更し、その下に新しい内容での里を設定したものである。

6－3 奈良時代(天平時代)

平城京に遷都され、奈良時代に入ると、天平12年頃を境にして新しい里が廃され、国一郡一郷の郡郷制に変化している。木簡や金石文に年号名がない場合、年代判定にこのことが活用される。先の和銅7年(714)木簡は郷里制施行前年のものであるから、「高座郡美濃里」とあり郡里制に合致している。次に郷里制下のものとして、同じ高座郡の綾瀬市の宮久保遺跡出土の木簡がある。そこには「鎌倉郷鎌倉里輕部□稻天平五年九月」とある。鎌倉郡から高座郡に運ばれた稲に付いていた付け札木簡で、天平五年(732)は郷里制下なので、「鎌倉郷鎌倉里」とある。前者の美濃里の里と後者の鎌倉里の里は同じ「里」ではあるが内容は違う。美濃里の「里」は後者で言えば「郷」にあたるものである。美濃里は現在の相模原市内であろう。また、鎌倉市御成小学校敷地内出土の木簡も同じく天平五年のもので、「糲五斗天平五年七月十四日」とある裏面の「郷長丸子□□」の「郷

長」は霊亀元年以前ならば「里長」とあるべきところのものである。

藤沢市域の大半は高座郡（高倉郡）であるが、片瀬・江の島地区は鎌倉郡に含まれる。『和名類聚抄』によれば、高座郡には美濃・伊参・有鹿・深見・高座・渭提・寒川・塩田・二實（二寶）・岡本・土甘・河会・大庭の13の郷（五十戸・里の後身）と1つの駅家があった。高座郷に関して、藤沢市北部の高倉の地名があるが、これは明治八年（1875）に七次村と千束村が合併した際に新たな村の名として高倉村を採用したものであって、その所在は古代の高倉（高座）郷には遡りはない。

【引用・参考文献】

- 藤沢市 2008・09・11・14・15『大地に刻まれた藤沢の歴史』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 藤沢市教育委員会
- 田尾誠敏・荒井秀規 2017『古代神奈川の道と交通』藤沢市文書館
- 藤沢市 1991『図説ふじさわの歴史』藤沢市文書館
- 白石太一郎 2004『考古学と歴史』一般財団法人 放送大学教育振興会
- 藤沢市 1972『藤沢市史』第4巻 通史編 藤沢市史編さん委員会
- 藤沢市 1999『長後・湘南台の遺跡』藤沢市教育委員会
- 藤沢市 2017『下土棚諏訪ノ棚遺跡第4次調査』玉川文化財研究所
- 藤沢市 2022『藤沢市下土棚夏刈東遺跡』見学資料 藤沢市郷土歴史課

- 担当：久保田幸雄

7 平安時代

平安京に遷都され、平安時代の十世紀ともなると、律令体制もその矛盾が現われ、特に東国では承平5年から天慶3年（935～940）の平将門の乱、長元元年から4年（1028～1031）の平忠常の乱、永承6年から康平5年（1051～1062）にわたる前9年の役、永保3年から寛治元年（1083～1087）にかけての後3年の役、と大きな争乱が続いた。争乱の主人公はやがて貴族にかわり政権をとる武士たちであった。東国の広大な原野は名馬を生み、そこに「弓馬の士」たる武士と武士団の成長の基盤があった。律令制下には、東国の馬は重用された。当時公式の牧には御牧（勅旨牧）、諸国牧、近都牧の3種があった。最上の馬を飼育する御牧の所在地は、甲斐、武蔵、信濃、上野の東国4国であった。相模国には高野牧という諸国牧があり馬と牛が飼育されていたが、一説によるとその地は伊勢原台地という。こうした東国の土壌が中世武士団誕生の母体となった。延暦11年（792）に兵士制を廃して新たに置かれた健児の制は、対蝦夷政策と言えようが、その内容は郡司層の子弟である健児一人につき馬子二人を付けるものであり、馬には民間の馬が登用された。こうした東国の有力層の兵集団が都から下った下級貴族を貴種として仰ぎ、彼を名目的中心として次第に結束していく。やがてそれは血縁・地縁関係の中で離合集散しながらも、各地に武士団を成立させていった。

おごり久しかった平家の公達にかわって登場したのは、源頼朝を将軍と仰ぐ武士階層である。この人々は、長い間、貴族の政治支配に苦汁をなめてきた階層であった。これが在地（地方）で一定の富力と武力を蓄えながら次代を担う社会的存在に成長し、やがて自らの利益を代表する公的機関の樹立を実現する主体へと昇化していった。つまり鎌倉幕府の成立である。そうした武士のなかに、渋谷一族があった。渋谷氏は秩父氏の流れをくみその定着した場所は現在の藤沢市長後といわれ、その拠点となるとところに渋谷城（館）を築いた。その地点は長後天満宮のあるところを中心としたところと伝えられる。当時の城は、自然の地形を利用してつくられたが、天満宮の周囲はその名残りをわずかに伝えている。

この一族の長は渋谷重国という人物であるが、彼の子息5人と共に周囲の土地の開発を行っていた。開発いっても、自然湧水の豊富なところとか、陽あたりの良い場所とかを考えて行ったのであり、したがって湿田を主体とする農業にならざるをえなかった。こうして渋谷氏は境川や引地川、蓼川、比留川、目久尻川等の水流に沿った地点の開発を行った。

鎌倉時代になって、渋谷氏は長後を中心とする地域一帯に領地を広げる中で、

その地域の支配者として君臨するようになる。農民にとってはここでまた新しい形の支配者を迎えることとなった。

7－1 桓武平氏とは

・桓武天皇（50代）の曾孫である高望王が臣籍降下し、平姓を名乗る。→平高望

・昌泰元年（898）、上総介に任命されると、子息を率いて任地の上総国に赴く。延喜二年（902）に上総国を離れて大宰府に居住するが、子息たちは留まる。地元豪族との婚姻により、関東に勢力を張る。

国香流：伊勢平氏・北条氏・熊谷氏など

良将流：将門

良文流：（忠常から）千葉氏・相馬氏・武石氏・国分氏・東氏・境氏・金田氏・片岡氏など

（忠道から）鎌倉氏・大庭氏・懷島氏・俣野氏・豊田氏・梶原氏・長尾氏・長江氏・三浦氏・岡崎氏・佐原氏・和田氏・葦名氏・大多和氏など

（将常から）秩父氏・畠山氏・河越氏・江戸氏・豊島氏・葛西氏・渋谷氏・小山田氏など

（頼尊から）中村氏・土肥氏・土屋氏・二宮氏・小早川氏など

7－2 清和源氏とは

・清和天皇（56代）の孫である経基王が臣籍降下し、源姓を名乗る→源経基

・承平八年（938）に武蔵介に任命されると、任地の武蔵国に赴く。

平将門と対立し、都に戻る。関東で基盤を作れず、河内国・摂津国に基盤を持つ。

・平忠常の乱（1028）に際し、甲斐守であった頼信が忠常の追討に成功する。平直方が頼信の嫡子の頼義を女婿として迎え、鎌倉の館を譲る。

・頼義の子息である義家・義光から関東の武士団が誕生。

義家：足利氏・高氏・今川氏・^{しば}斬波氏・細川氏・新田氏・山名氏・里見氏・世良田氏・得河氏など

義光：武田氏・小笠原氏・佐竹氏・南部氏・安田氏・板垣氏・石和氏・加賀美氏など

・その他、嵯峨源氏（５２代）：渡辺氏など、宇多源氏（５９代）：佐々木氏など、村上源氏（６２代）：北畠氏・赤松氏など

７－３ 平将門の乱

・平将門、叔父の平国香や良兼、源護^{まもる}親子（嵯峨源氏）と所領や女性をめぐり争いとなる。承平五年（９３５）合戦となり、平国香と源護の子息が戦死。良兼は本拠（下野）に逃亡する。源護は、女婿の平良正の合力を得て将門と合戦するものの、敗北。良正、良兼と貞盛の合力を得て再度将門と合戦するものの、将門の勝利でおわる。

・承平六年（９３９）、源護が将門を朝廷に訴えるものの、翌年、恩赦により釈放。

・承平七年（９３７）、平良兼、再度将門を攻撃。奇策をもって将門を破る。将門はその後兵力を盛り返し、良兼を破る。貞盛、都へ逃亡。

・天慶二年（９３９）、武蔵国で権守^{おき よ おう}の興世王と介の源経基が、地元勢力の足立郡司の武芝と紛争をおこす。将門が調停に乗り出すものの、武芝と源経基の争いが起き、経基は京都に逃亡した。経基は朝廷に対し、将門と興世王らが謀反を起こしたと訴える。

・常陸国の住人、藤原玄明^{はるあき}は常陸国衙の倉庫より官物を強奪して国衙から追討を受ける。玄明は将門のもとに逃亡する。将門は国衙からの玄明引き渡しを拒否し、国衙軍との合戦となり国衙を占領した。朝廷に対する反逆行為となる。

・天慶二年１２月、平将門は、下総国・上総国・武蔵国・相模国を攻め、関東一円を手中におさめる。将門は、「新皇」を称し、朝廷からの独立を目指す。

・天慶三年（９４０）、朝廷の命により平貞盛が下総国押領使の藤原秀郷と共に将門を攻める。将門は戦死し、追討した平貞盛や藤原秀郷は叙爵される。平将門の乱は、のちの東国武士にとって大きな影響を与える。

７－４ 平忠常の乱

・平忠常：平将門と敵対していた平良文の孫。常陸国・下総国・上総国に先祖から伝わる広大な領地をもつ。

・長元元年（１０２８）、忠常が安房守平維忠^{これただ}を焼き殺す。原因は、不明だが

国主と在地領主との^{あつれき}軋轢か。

- ・朝廷、平直方と中原成道を追討使に任じ、忠常の追討を決定する。長元三年（1030）になっても追討できず。朝廷、平直方を罷免し、甲斐守源頼信を追討使に任命。

- ・源頼信、甲斐国より進発するものの、長期の争いで疲弊した忠常は大きな抵抗をせず降伏する。東国で源氏の名声が高まる。平直方、娘を頼信の子である頼義に嫁がせ、鎌倉の地を譲る。東国と東国のつながりができる。

- ・平忠常、都に囚人として送られるものの、美濃国で病没。^{くび}頸は都に運ばれる。子孫は下総国・上総国・安房国などに在地領主として残る。

・

7-5 前九年合戦（奥州十二合戦）

- ・永承六年（1051）、陸奥守藤原登任と奥六郡（岩手県）領主の安部頼良（時）の合戦が起きる。登任は合戦に敗れたため陸奥守を罷免させられ、代わりに源頼義が就任する。

- ・永承七年（1052）、後冷泉天皇祖母である上東門院の病氣平癒の祈願として、恩赦を発令。頼時は、朝廷反逆の罪を許される。

- ・天喜四年（1056）、源頼義と安部貞任との間で諍いがおこる。頼時は貞任の出頭を頼時に命ずるものの、頼時はこれを拒否し、合戦となる。頼時は合戦中に深手を負い戦死するものの、貞任が跡を継ぎ合戦は継続される。

- ・^{きのみ}黄海での合戦で、頼義の軍勢が大敗北し、安部軍が優勢となる。安部氏の勢力範囲が衣川を越え拡大する。頼義は、仙北三郡（秋田県）領主の清原氏に援軍を要請する。清原氏の参戦により形勢は逆転した。源頼義・清原氏連合軍の勝利で合戦はおわる。

- ・安部貞任は戦死。安部氏方の武将の藤原経清は^{つねきよ}鋸引きの刑で処刑される。経清の妻は清原武貞の妾になる。この際、経清の幼子（清衡）も連れ子となり、清原家に入る。

- ・合戦後、源頼義は陸奥守留任を認められず伊予守となる。奥六郡は清原氏の所領となり、奥州の一大勢力となる。

7－6 後三年合戦

・清原氏当主の真衡^{さねひら}、子がないために海道平氏の成衡^{しげひら}を養子とする。一族が猛反発して、清原家の内部分裂がおきる。

・清原氏一族の古彦秀武^{きみこのひでたけ}（真衡叔父）が、真衡に対し謀反を起こす。真衡の異母兄弟の家衡と連れ子の清衡も同調する。

・家衡らの反乱に対し、真衡は陸奥守源義家と連合し反乱軍と合戦。真衡・義家連合軍の勝利。家衡と清衡は降伏するものの、直後に真衡が急死する。義家は家衡・清衡を許し、奥六郡を2人に三郡ずつ継承させる裁定をする。

・義家の裁定に家衡が不満を持ち、清衡を攻撃する。清衡は敗走するものの、義家と連合し家衡と対峙する。清衡・義家連合軍の勝利となり、家衡は斬首される。

・朝廷は、義家の合戦を私戦として恩賞を出さず、陸奥守も解任される。義家は、合戦で功績のあった武士たちに対し、私費で恩賞を賄う。これにより、武士団で源氏の名声が高まる。

・奥六郡は後三年合戦後、清衡の所領となる。清衡は、実父の藤原姓に戻し、藤原清衡となり平泉の地に館を構える。（平泉藤原氏の初代）

大庭御厨—鎌倉党と鎌倉権五郎景政

7－7 鎌倉権五郎景政と大庭御厨

・鎌倉権五郎景政：桓武平氏良文流。後三年合戦に16歳で従軍する。景政は、右目を射られながらも奮戦した。この時の三浦為継とのやりとりが有名。

・大庭御厨

永久四年（1116）立券。鎌倉権五郎景政が先祖伝来の所領を開墾し、伊勢神宮へ寄進した。

・大庭御厨の四至 『天養記』より

東：俣野川（境川） 西：神郷（寒川社領） 南：海 北：大牧崎（六会周辺）

・大庭御厨の継承

下司職は鎌倉権五郎景政から子息の景継へ。ただし景継の子である長江義景には継承されない。一族の大庭景宗が大庭御厨の下司職を継承する。

・鎌倉党：鎌倉郡南西部および高座郡南部に勢力を張った一族集団。名前に「景」の字を用いることが多い。大庭景親・懷島景能・豊田景俊・俣野景久・梶

原景時・長尾定景・長江義景など。

・源義朝濫行事件：天養元年（1144）9月上旬、源義朝郎従が鵜沼郷に濫行。神人に重傷を負わせ、大豆や小豆などの作物を刈り取る。

・同年10月21日、義朝の名代・清原安行や三浦義継・中村宗平らが千余を率いて鵜沼郷に再度濫行した。保元の乱（1156）には源義朝配下として大庭景宗の子息である懷島景能と大庭景親が参戦した。

7－8 保元・平治の乱と平氏・源氏

・平正盛は源義親討伐で武名を挙げる。子息の忠盛は、白河院政期・鳥羽院政期に勢力をのぼし、西国に平氏の基盤を作る。源氏は、源義家以降、一族の内紛により朝廷内での影響力が薄くなる。

・保元の乱（1156）：天皇家の皇位継承や摂関家の内紛により起きた武力衝突。

勝者：後白河天皇（天皇家）・藤原忠通（摂関家）・平清盛（平氏）・源義朝（源氏）

敗者：崇徳上皇（天皇家）・藤原頼長（摂関家）・平忠正（平氏）・源為義（源氏）・源為朝（源氏）

平氏は嫡流と不和である忠正が処刑されたのみで、嫡流の力が強まる。源氏は親兄弟に別れて戦う。そのため一族の力は減退し、家臣団の人心も離れる。

・平治の乱（1159）：保元の乱の勝者内の権力争い。

勝者：平清盛 敗者：源義朝

源氏は基盤である東国も失う。（ただし、影響力はのこる）。

義平（長男）：処刑 朝長（次男）：戦死 頼朝（三男・嫡子）：流罪 頼朝の弟たち：流罪か出家

・平氏政権での相模国統治は大庭氏が担う。義朝・義平親子の腹心であった中村党（中村氏・土肥氏・土屋氏など）・三浦党（三浦氏・岡崎氏・佐原氏など）は冷遇される。似たような状況が、東国各地で起こる。

7－9 鎌倉党の発展と治承・寿永の乱

大庭氏：大庭郷（藤沢市大庭） 懷島氏：懷島郷（茅ヶ崎市円蔵・西久保）

俣野氏：俣野郷（藤沢市俣野か横浜市戸塚区東俣野） 梶原氏：梶原郷（鎌倉市梶原・深沢）

長尾氏：長尾郷（横浜市栄区長尾台町）

・治承・寿永の乱：諸国の源氏追討の際に、平氏政権に不満を持つ東国の在地領主の一部が源氏に加担。

頼朝方（反乱軍）：懷島景能、豊田景俊

平氏軍（官軍）：大庭景親、俣野景久、梶原景時、長尾定景

助命：梶原景時・長尾定景 斬首：大庭景親 戦死：俣野景久

大庭御厨は懷島景能が継承

7-10 鎌倉党のその後

①梶原氏

「鎌倉本体の武士」と称されるほどの頼朝の信頼を得るが、頼朝の死後失脚し討たれる。

②大庭氏

景能が幕府の宿老として活躍するものの、和田合戦（1213）で大庭景兼が和田義盛に加担し戦死。大庭御厨は戦功のあった御家人に分与。

③豊田氏

和田合戦で和田義盛方に加担し戦死。所領は没収。

④長尾氏

三浦氏の被官となるものの、宝治合戦（1247）で衰退した。のちに上杉氏の被官となり勢力が拡大した。各上杉氏の^{かさい}家宰となる。（上杉謙信ももとは長尾姓）

7-11 鎌倉時代以後の大庭御厨

・鎌倉公方御領所か。成氏から結城氏という可能性がある。

・江の島合戦後は扇谷上杉氏が領する。伊勢神宮が太田道真・道灌親子に年貢の未進を訴える。地元の武士団による年貢の押領が頻発し、大庭御厨は有名無実化する。

以上は 2017 年 8 月 28 日（月）長後市民センターで行われた藤沢市郷土歴史課 宇都洋平氏の講座資料を参考とした

7－12 「坂東」「坂東八平氏」とは

坂東とは、東海道足柄坂より東、東山道碓井坂より東を指す。坂東八国は、相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野である。

坂東八平とは、平安後期に坂東に割拠した桓武平氏良文流の武士団のこと。普通、千葉・上総・三浦・土肥・秩父・大庭・梶原・長尾の八氏をあてるが、八は多さを示すので、むしろこの地方に繁衍した多数の同流一族に対する総称とする見方もある。ただし、その範囲は坂東のうち、両総と武蔵・相模に限定される。千葉氏は下総国の在庁官人で下総権介職を世襲し、千葉荘（千葉市）を本拠とする。上総氏は上総権介職を世襲して玉崎荘、千葉県長生郡一宮町・睦沢町を中心に上総一国から下総まで勢力を有し、坂東最大の武士団を構成した。三浦氏は相模国三浦荘（神奈川県三浦市）による在庁官人。土肥氏は相模国中村荘（神奈川県小田原市・足柄上郡中井町）を本拠として国衙に基盤をもつ中村氏の一族。秩父氏は武蔵国に在庁職を有し、河越荘（埼玉県川越市）を本拠とした川越氏をはじめ、国内に分立した畠山・江戸氏などの一族の総称。大庭氏・梶原氏・長尾氏は、相模国鎌倉郡（神奈川県鎌倉市）に成立した鎌倉党の構成員で、このうち大庭氏は平氏政権下では三浦・中村氏を凌ぐ勢力を示した。

国衙（役所）、濫行（乱行）、未進（未納）の（ ）は現代語

担当：久保田幸雄

源氏略系図

桓武天皇 — 葛原親王 — 高見王 — 高望王

高望王の皇子：

- 良茂
- 良持
- 良文 — 忠頼 — 忠常 — 常時 (千葉氏祖) — 忠通 (鎌倉党祖)
- 良将 — 将門 — 将常 (秩父氏祖)
- 良兼
- 国香 — 貞盛 — 維衡 — 正度 — 正衡 — 正盛 — 忠盛 — 清盛 — 維将 — 維時 — 直方 (北条氏・熊谷氏祖)

平氏略系図

清和天皇 — 貞純親王 — 経基 — 満仲 — 頼信 — 頼義 — 義家 — 義親 — 為義 — 為朝

頼信の皇子：頼光

義家の皇子：義盛、義賢、義仲

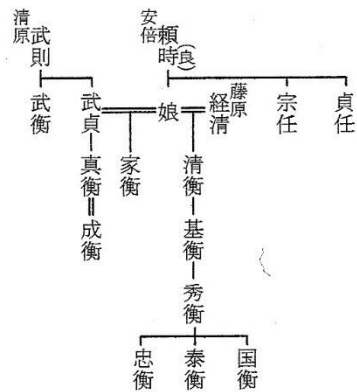
為朝の皇子：義朝、頼朝、義平

義朝の皇子：義経、実朝

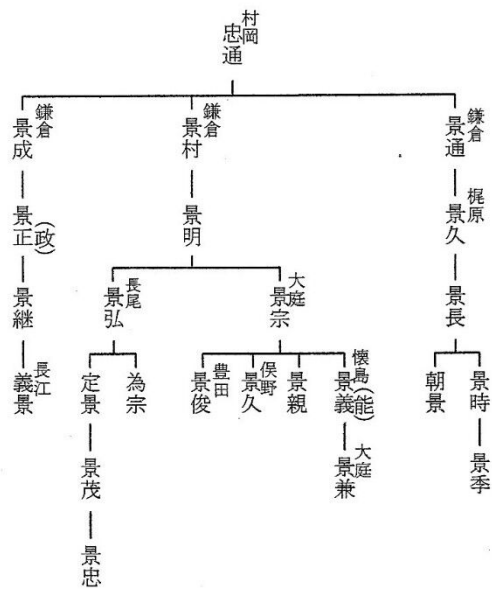
頼朝の皇子：頼家 — 公暁

義経の皇子：実朝

7-15 安倍氏・清原氏・藤原氏略系図、鎌倉党略系図



安倍氏・清原氏・藤原氏略系図



鎌倉党略系図（『系図編要』を基に作成）

8 鎌倉時代

8-1 平安末期から鎌倉時代の渋谷氏

平安時代後期、地方の豪族の中に、土地を開墾して領地とするものがあらわれた。その一部を国衙領にして税を納め、あとは有力な貴族や寺社に寄進して荘園にするなど、工夫をこらして重税を免れようとした。

また、中央から国衙に派遣された皇族関係の国司と姻戚関係を結んだり、自ら郡司の職を得るなどして、権勢を高めていく一族も出てきた。

彼らは土地を守るために武装して武士となり、互いに協力関係を結ぶなどして、やがて武士団を形成していった。

この平安末期から鎌倉初期にかけてあらわれた武士のひとりが渋谷庄司重国で、重国は長後地区を本拠地としたと伝えられている。「渋谷庄司」という呼び名は、渋谷荘の現地管理者を意味する。『吾妻鏡』の弘長元年（1261年）5月13日の条には、重国を回想して「相模国大名内也」（相模の国の大名の内なり）という記述があり、そのころ相模国内でも有数の実力者であったことがうかがえる。

一説によると、長後天満宮の周辺に館を構えたとの言い伝えがあり、近くに土塁なども発見されてはいるが、まだ実証はされていない。ただ、海老名市の上浜田遺跡から発見された御家人の館跡などから見ても、館の前面に水田と川があり、裏には牧に適した台地を背負う地形が、長後天満宮周辺と類似点の多いことから、そこに武士の館があった可能性は高い。

渋谷重国は武蔵最大の武士団、秩父平氏の流系で、秩父平氏は山間部の秩父から平野部に進出した一族である。重綱の流れは畠山、河越、小山田などを拠点に発展したが、重国は別系統で、重国の祖父基家は小机、父重家は河崎、重国の兄弟重真（重実）は中山を拠点とした。

平安末期、保元・平治の乱を経て隆盛を誇るに至った平氏政権（平清盛を中心とする伊勢平氏正盛流）に対し、不満を募らせる勢力が反乱を起こした。治承4年（1180年）から元暦2年（1185年）の6年間にわたる治承・寿永の乱である。

この乱は、後白河法皇の皇子以仁王の挙兵をきっかけとして起こり、反乱勢力同士の対立などもあって足並みが乱れることもあったが、最終的には源頼朝を中心とする板東平氏らから構成される武士集団によって、平氏政権は打倒された。これにより頼朝は鎌倉に幕府を開き、新たな武士政権を打ち立てた。

内乱時当初、重国はそれまで平氏に仕官していて「重恩」があるとして、誘われても頼朝にはつかず、平氏方の大庭景親側に参戦した。しかし翌年、景親が捕

らえられて片瀬川付近でさらし首になると、関東の平氏勢力は急速に弱まった。
景親が敗れると武蔵・相模の武士たちは、いっせいに平氏への「重恩」を捨て、重国もまた同様に頼朝側についた。

鎌倉幕府は、政治的な安定をはかるために鎮圧行動に出た。重国も木曾義仲の掃討に参戦し、残党狩りの先頭にも立った。また、頼朝の弟、範頼とともに、平氏残党と反幕勢力の追討のために九州方面へ出兵し、功名をあげている。

文治2年（1186年）の時点で重国は、幕府の最も信頼できる鎌倉武士として評価された。『吾妻鏡』文治5年（1189年）11月17日の条には、「二品爲歴覽鷹場。出大庭邊給。野徑催興之間。令到澁谷庄給。及昏黒。狐一疋走御馬前。……其後入御澁谷庄司許。先有御酒宴。重國經營尽美云々」（二品鷹場を歴覧せんが為大庭の辺に出で給う。野徑興を催すの間、渋谷庄に到らしめ給う。昏黒に及び、狐一疋御馬前を走る。……その後渋谷庄司の許に入御す。先ず御酒宴有り。重国の経営美を尽くすと）とあり、頼朝が渋谷館に泊まることもあったとされている。

また頼朝は、建久3年（1192年）12月20日に渋谷氏の武勇にたいして、園城寺円満院の所領であった「相模国吉田荘」の地頭に任命した。この時に、渋谷氏が吉田荘の年貢をまとめて、荘園領主の円満院に送るという契約関係が定められた。

このとき、それまでの吉田荘の年貢は、染衣・絹・長鮑（鮑の肉を薄く長くはぎ、引きのばして乾燥させたもの）・移花（染紙の一種。露草の花の汁を紙にしませたもの）・染革など現物で納入されていたが、それらに代わって銭で納められるようになった。

重国の出生、没年ともに不明で、『吾妻鏡』における建久5年（1194年）12月15日の条、導師を迎える馬の割り当ての記事が、重国の名が記された最後のものとなった。したがって重国は、この後それほど時を経ずして没したのではないと思われる。

戦乱がおさまると、幕府の実権をにぎる権力欲の激しい北条氏によって、重臣化した実力のある武士たちは次々に圧殺されていく。とくに障害となるのが幕府近くに居を構える武蔵・相模の武士で、彼らが標的となった。重国の次男高重が和田義盛の乱に加担したため渋谷荘は没収され、将軍御所に仕えていた女房因幡局に与えられた。

重国の子、光重は、宝治合戦では北条側についたため、恩賞として、薩摩国の高城郡、東郷別府、入来院、祁答院を下賜された。光重はそれらを6人の子息に分け、薩摩国へと移住させた。次男実重は東郷別府を、三男重保は祁答院、四男

重茂は鶴田、五男定心は入来院、六男重定は高城を与えられた。これらが薩摩渋谷氏である。

長男の重直には、幕府に勤務する場合の経費負担地とするため、打戻、深谷の地域を与えられた。当時の財産台帳によると、打戻だけで6町歩の耕地があったとされる。

*二品：

源頼朝は、平家を滅亡させた「恩賞」として、1185年4月、従2位に昇叙する。ただし散位（官に就いていない位階のみ）であったため、2位の唐名である「二品」と称された。その期間は1185年から1190年まで。

***円満院：**滋賀県大津市園城寺町にある天台宗系の寺院。山号は長等山。本尊は不動明王。門跡寺院。近畿三十六不動尊第25番札所。かつては天台宗寺門派（天台寺門宗）三門跡の一つであった。

寛和3年（987年）に村上天皇の皇子悟円法親王により京都岡崎に「平等院」として創建されたと伝わるが、平安時代中期の参議・藤原資房の日記『春記』には、園城寺の明尊大僧正が長久元年（1040年）に後朱雀天皇の支援を受けて岡崎の地に新しい寺を創建し「圓満院」と命名したと記されている。

永承7年（1052年）、関白藤原頼通が父の道長の別荘であった宇治殿を寺院に改修し、平等院の明尊大僧正をこの寺の開山とした。そして悟円法親王の子である永円法親王が新寺院の初代院主となり、その際に平等院の名称をこの新寺院に譲り、岡崎の平等院はあらたに明尊大僧正によって円満院と名付けられた。

悟円法親王入寺以降も円満院は歴代皇族の入室する門跡寺院として、また天台宗寺門派（天台寺門宗）の三門跡の一つとして隆盛を誇った。また、通称として室町時代後期までは三井平等院とも桜井の宮とも呼ばれていた。

***宝治合戦：**鎌倉幕府の内乱。執権北条氏と有力御家人三浦氏の対立から宝治元年（1247年）6月5日に鎌倉で武力衝突が起こり、北条氏と外戚安達氏らによって三浦一族とそれに組する勢力が滅ぼされた。

8-2 渋谷荘

渋谷荘は、長後から綾瀬市にかけて存在した荘園で、その中心地は、長後から円行にかけての引地川本流域であったと思われる。古くは吉田荘とも呼ばれ、鎌倉初期には、所領関係文書の多くが吉田荘を使用している。『壬生家文書』文永5年（1268年）

11月では、相模国吉田荘は円満院領とある。『法華堂文書』弘安8年（1285年）11月には、「相模国渋谷荘西飯田郷内」と記されていることから、渋谷荘は引地川本流域のほか、境川流域の飯田郷や吉田郷にまで広がっていたことが

分かる。

本来別々の荘園であった渋谷荘と吉田荘の混用は、次のように考えられる。重国が渋谷荘に土着したあと、建久3年（1192年）に円満院の所領地吉田荘の地頭に任命される。その後、渋谷氏は徐々に吉田荘を浸食していったため、名称が渋谷荘と通称されるようになったのではないか。したがって、実質的には同じ荘域であったと考えられる。なお、両荘域を明記した史料は存在しない。

渋谷荘は、北、東、西を国衙領に、南西部は一宮庄（寒川町）、南は大庭御厨（藤沢市・茅ヶ崎市）などに囲まれていた。頼朝が鷹場巡覧を行ったのは大庭御厨の北端にあった大牧崎といわれる牧場で、渋谷荘との境界（現在の湘南台あたり）にあたると思われる。

渋谷荘域の主な郷村は、目久尻川流域（曾司・早川・吉岡・用田）、小出川水系（打戻）・比留川流域（寺尾・藤意・上深谷・深谷・下深谷・落合）、引地川本流域（福田・長後・土棚・円行・石川）、引地川支流の一色川流域（葛原・菖蒲沢）、境川西岸（千束・セツ次）で、現在の地域で見ると、藤沢市北部一帯と綾瀬市全域にあたる。

建保元年（1213年）5月の和田合戦では、渋谷氏は姻戚関係にあった和田義盛に味方したため北条義時に敗れ、高重らは戦死し、渋谷荘は没収された。

承久3年（1221年）の承久の乱（後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時に対して討伐の兵を挙げて敗れた兵乱）では、重国の子、光重・時国が幕府方として出陣し、6月14日の宇治川の合戦で時国は戦死したが、光重は敵を討ち取るなど活躍を見せた。和田合戦で一部領地は削がれたものの、承久の乱の功績により、光重は円満院領を引き継ぐことになったと思われる。さらにその孫たちは早川、吉岡、曾師、落合、大谷を名乗り、それぞれを拠点とした。

宝治元年（1247年）の宝治合戦では三浦一族と戦い、新たな所領を得た渋谷氏は、嫡流重直を相模に残して、実重以下の兄弟が、新所領の薩摩入来院（鹿児島県薩摩川内市）へと移っていった。

*** 壬生家：**小槻 隆職（1135年～1198年）を祖とし、南北朝時代に壬生を名乗った貴族。小槻氏は中世より太政官弁官局において記録係、算博士などを世襲した。

*** 国衙領**は、座間郷（座間市）・絃間郷（相模原市南区・大和市）・深見郷・和田郷（ともに大和市）・飯田郷（横浜市泉区）・海老名郷（海老名市）など。

鎌倉時代の渋谷荘の文書等は、ほとんど発見されていない。その理由として、和田義盛の乱のあと没収された渋谷荘が、幕府関係者の所有になったことが一因と思われる。

わずかな手がかりとして地元に残る伝承や故地から推察してみると、小字渋谷ノ里・渋谷ヶ原がある下土棚も、渋谷荘の荘域であった可能性がある。また、渋谷ノ里と南で接する小字中村には山号を「渋谷山」と称する善然寺があり、後世に作られたものと思われるが、伝説上の人物「渋谷金王丸」の生誕の地との伝承も持っている。したがって、この長後地区の引地川近くには、渋谷氏に関連した何かが存在したのではないか。

吉田荘の領家への年貢は金銭納入に変わったが、従来は布・絹が多く物納されていて、そこから推測して、渋谷氏の荘園は畑作を中心としたものだったと考えられる。また長鮑など、江ノ島界限で取れるものを入手、加工していることから、渋谷荘と海辺との交流がうかがえる。

いずれにしても、鎌倉時代の長後地区は渋谷荘域にあり、引地川・目久尻川流域を水田開発しながら、荘園として畑作中心の生産活動を担っていたと思われる。

そのほかの平安末期から鎌倉幕府滅亡までの長後の出来事として、昭和63年に広田俊夫氏によってまとめられた『藤沢市北部地区郷土史年表』に、以下のような記述がある。

- ・平治元年（1159年）：12月平治の乱源義朝敗れ尾張の国へ逃れ、翌年1月長田忠致親子に謀殺される。従者渋谷金王丸一旦京に上り、後、東国に逃れ渋谷荘（下土棚）に入る（平治物語）。
- ・健保元年（1213年）：5月2日和田氏の乱が起こり高座鎌倉両郡の御家人多数参加戦死。渋谷金王丸も鎌倉より敗走、上高倉の災難山で遂に北条義時の軍に討たれる。その首は綾瀬市早川の長川寺（長泉寺か？）に葬られる。
- ・元弘3年（1333年）：この頃西光法師、下土棚夏刈に善然寺を創建する。5月16日新田義貞、分倍川原の陣営より瀬谷原を経て、高座郡に入り南下して、藤沢村岡を焼き払い稲村ヶ崎より鎌倉に討ち入る。21日鎌倉陥る。北条氏滅亡。

参考資料

『図説 ふじさわの歴史』 藤沢市

『歴史をひもとく 藤沢の資料 6 長後地区』 藤沢市文書館

担当：池田純子

9 室町時代

関東の戦国黎明期一扇谷上杉氏の動向を中心
玉縄城一小田原北条氏の東郡経営の拠点

9-1 鎌倉府と鎌倉公方

鎌倉府：関東八ヶ国＋伊豆国・甲斐国を管轄する室町幕府の機関。前身は建武の新政の際に設置された鎌倉將軍府。

※1392年に陸奥国・出羽国が追加されるものの、1400年の奥州探題設置により管轄する国はもとの10ヶ国に戻る。

鎌倉公方：足利氏の子である基氏が初代。このち、基氏の子孫が鎌倉公方職（元々は関東管領）を継承し、補佐官である関東管領（元々は執事）は上杉氏が世襲する。

※代を重ねるにつれ、室町幕府に対して独立気質が高くなる。

※※関東管領は高師冬以降、山内上杉氏と犬懸上杉氏が代々務める。

9-2 上杉弾秀の乱（応永二十三年（1416））

〔將軍：足利義時（4代） 鎌倉公方：足利持氏（4代）〕

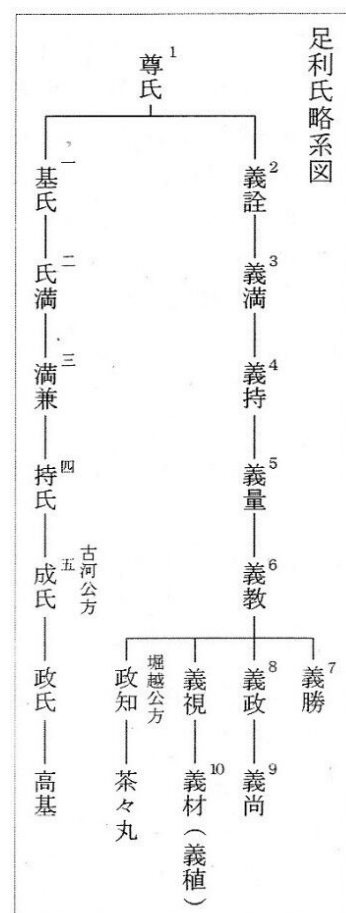
- ・鎌倉公方2代氏満の頃から室町幕府と水面下での対立。
- ・3代満兼の時、室町幕府の後押しを得た伊達政宗が南下。これを犬懸上杉氏憲（弾秀）が撃退。奥州での影響力を強くする。

（山内上杉氏との対立。）

- ・鎌倉公方3代満兼死去し持氏が4代公方に就任するにあたり、山内上杉憲定が関東管領となるが、応永十八年（1411）に持氏と対立し、失脚。

（犬懸上杉氏憲が関東管領となる。）

- ・応永二十二年（1415）、持氏と氏憲が対立し、関東管領職を剥奪される。



- ・応永二十三年（1416）十月、持氏の叔父である満隆らと語らい氏憲が反乱を起こす。
（近隣の大豪族を与党とした大反乱。室町幕府、これまでの行きがかりを捨て鎌倉公方を支援して援軍をおくる。）
（鎌倉公方・室町幕府軍の勝利。犬懸上杉氏憲や足利満隆ら主要な者は自害。）
（犬懸上杉氏の事実上滅亡。）

9－3 永享の乱（永享十年（1438））

〔将軍：足利義教（6代） 鎌倉公方：足利持氏（4代）〕

- ・上杉弾秀の乱以降、関東管領職は山内上杉氏が独占。室町幕府との関係が強くなる。
（鎌倉公方と関東管領の対立化が顕著となる。）
- ・鎌倉公方持氏、上杉弾秀の乱の与党狩りを称して、親幕府方の諸豪族を討伐。
- ・室町幕府6代将軍しょうぐんよしのり義教就任の際、元号が永享えいきょうに変更したが、持氏は従わず。

（関東管領山内上杉のりざね憲実、持氏を諫めるも聞かず。）

- ・永享七年（1435）、持氏が室町幕府に対して軍事行動を起こそうとし、憲実に制止させられたことをきっかけに鎌倉公方と関東管領の対立が決定的となる。
- ・永享九年（1437）、持氏が憲実を暗殺するという風聞が流れ、憲実は藤沢へ逃れる。
（のちに和解するが、翌年再び対立し、憲実は本拠地である上野国平井城へ逃れる。）
- ・永享十年（1438）、鎌倉公方足利持氏、関東管領山内上杉憲実を討伐するため兵をたて軍事行動を起こす。
（関東管領山内上杉憲実を討伐するため兵の軍事行動を起こす。）
（憲実、室町幕府に援軍を請う。6代将軍義教、持氏討伐の援軍を送る。）
（室町幕府・山内上杉軍の勝利。憲実、持氏の助命と嫡子義久の鎌倉公方就任を幕府に対し嘆願するが許されず。）
（この際、密かに持氏の遺児が与党である結城氏のもとに逃れ、匿われる。）

9-4 結城合戦（永享十二年（1440））

〔将軍：足利義教（6代）〕

・室町幕府6代義教、子息の政知を鎌倉公方とするため、下向させる計画をたてる。

（持氏の与党が猛反発。結城氏朝・持朝親子が持氏の遺児を担ぎ挙兵。）

・関東管領山内上杉清方を総大将、扇谷上杉持朝を副将として結城城を攻撃。（結城親子は討死。持氏の遺児も京に送られる途中の美濃国にて殺害される。）

9-5 扇谷上杉氏

・顕定の代に鎌倉へ下向。扇ガ谷に住したことから扇谷上杉氏と呼ばれる。

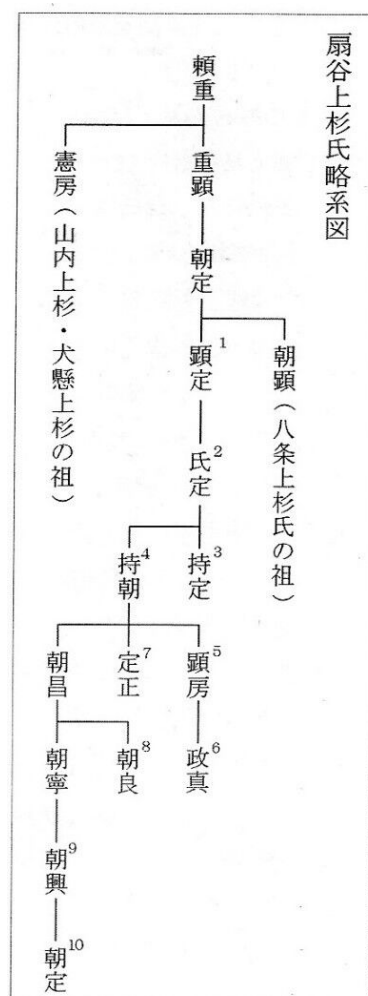
・関東での家格は山内上杉氏や犬懸上杉氏の次。

・氏定は上杉弾秀の乱の際、鎌倉公方足利持氏に与同するものの、重傷を負い、藤沢で自害。（犬懸上杉氏没落後は、山内上杉氏に次ぐ勢力を持つ。）

・永享の乱では持朝が関東管領山内上杉憲実に従い、戦功を上げる。

・結城合戦の際、結城一族は上杉憲実と扇谷上杉持朝の退罰を標榜する。

（扇谷上杉氏の地位を知る上で重要。）



9-6 江ノ島合戦と享徳の乱（宝徳二年（1450）・享徳三年（1454））

〔将軍：足利義勝（7代）・足利義政（8代）鎌倉公方：足利成氏（5代）〕

・結城合戦ののち、山内上杉氏の勢力が強まる。同時に関東の武士団に不満がつる。

・嘉吉の乱（1441）で将軍喜教が赤松満祐に殺害されると、京も関東も世情不安となる。

（関東の動揺を抑えるため、信濃国で匿われていた持氏の遺児・成氏を鎌倉公方に任命する。）

・鎌倉府では鎌倉公方5代に足利成氏が就任し、関東管領に山内上杉憲実の子息憲忠が就任する。

（成氏と憲忠の関係は^{はかばか}渉々しくなく、関係は悪化。）

・宝徳二年（1450）、両上杉の家宰である太田道真・長尾景仲が御所を襲撃するとの風聞が流れ、成氏は江ノ島に逃れる。鎌倉公方軍と両上杉軍の軍勢が対岸の腰越・由比ガ浜で合戦。

（両上杉氏軍は敗退し、持朝・顕房親子は中郡の七沢要害へ、太田道真は糟屋庄へ逃れる。）

（のちに和解するものの、火種は燻ったまま。）

・享徳三年（1455）十二月二十七日、成氏が憲忠を暗殺する。これにより鎌倉公方と関東管領の争いが勃発。

（憲忠の謀殺後、在京していた弟の房顕は関東管領職を継承し、上野国平井城に拠る。）

（憲忠謀殺を聞いた持朝は翌年正月に本拠地の糟屋を出撃し、鎌倉に侵攻するものの、相模国島河原（平塚市）で鎌倉公方軍に敗退し伊豆国三島へ退く。）

（持朝の嫡子・顕房（持朝は宝徳元年に隠居し、家督を顕房に譲る）は上野国平井城から山内上杉氏の軍勢と共に南下し鎌倉へ侵攻するものの、武蔵高幡・分倍河原の合戦で、顕房が深手を負い自害。家督は持朝が再び継ぐ。）

（関東の武士団も鎌倉公方方と関東管領方に別れて争いを繰り広げる。）

（両上杉軍は武蔵国五十子（埼玉県本庄市）に前線基地として陣を張り（五十子陣）、以降鎌倉公方軍と長期に渡り睨み合う。）

（足利公方成氏は、この後鎌倉から下総国古河へ本拠地を移す。古河公方の誕生。）

・室町将軍8代義政は両上杉側を支援。庶兄の政知を成氏に代り鎌倉公方とすべく長禄二年（1458）に下向させるが、関東の武士団の協力を得られず伊豆国堀越に拠点をつくる。堀越公方の誕生。

9－7 享徳の乱の扇谷上杉氏の動向

・長禄元年（1457）四月、太田道真・道灌親子を中心に河越城と江戸城を築

城。

(相模国の本拠地は糟屋館、武蔵国の本拠地は河越城に置く。)

- ・堀越公方と相模・武蔵の権益をめぐり対立。

- ・応仁元年(1467)、持朝が河越城にて死去。家督は嫡孫の政真^{まさざね}が継承。

(応仁の乱は応仁元年(1467)～文明九年(1477))

- ・政真在任中(1467～1473)に大庭城築城？

(杉山説(藤沢市史4巻 通史編1972)。ただし明確な根拠はなし。)

- ・文明五年(1473)、政真が古河公方方との合戦で戦死。

(老臣による評定で、持朝の子息(政真の叔父)である定正が家督を継承。)

9-8 長尾景春の乱(文明八年(1476))

[将軍：足利義尚(9代) 古河公方：足利成氏]

- ・文明八年(1476)六月、山内上杉氏の家宰である白井長尾景信が死去。山

内上杉顕定^{うえすぎあきさだ}は景信の弟の忠景を家宰に指名。

(景信の嫡子である景春がこの裁定に不満を持ち、武蔵国鉢形城(埼玉県寄居町)で挙兵。山内上杉氏の家臣の一部が呼応する。)

- ・文明九年(1477)正月、五十子陣^{いかっこじん}が陥落し、扇谷上杉定正や太田道真は東上野に後退。

(当時今川氏の内訌に介入するため駿河国に赴いていた太田道灌は軍勢を引き連れ江戸城に戻り、武蔵国内の景春勢力を攻略。こののちも各地を転戦。)

- ・文明十二年(1480)六月、長尾景春の乱終結。

(景春に与した相模・南武蔵の諸勢力の所領は扇谷上杉氏に帰属。)

(景春与党の諸勢力は元々山内上杉氏の家臣。これにより、両国内の山内上杉氏の影響力は薄くなる一方、扇谷上杉氏の影響力は強くなる。)

- ・文明十四年(1482)十一月、室町幕府と古河公方の和睦が成立。「都鄙和睦」

9-9 長享の乱(長享元年(1487))

[将軍：足利義尚(9代) 古河公方：足利成氏]

・文明十八年(1486)七月二十六日、相模国糟屋館にて太田道灌暗殺される。
(家宰として道灌と定正の側近勢力による対立など様々な要因が想定されている。)

(道灌の嫡子は山内上杉氏を頼り逃亡。)

・長享元年(1487)十一月、両上杉が武力衝突。扇谷上杉氏は古河公方と結びつき、山内上杉氏と敵対。

(扇谷上杉旗下であった三浦氏や武蔵千葉氏が離反し、山内上杉氏につく。)

・長享二年(1488)5月頃、中郡の要所である七沢要害が山内上杉氏により陥落。守将の扇谷上杉朝昌^{ともまさ}は大庭要害に移る。

(大庭城も東郡の要所)

・明応三年(1494)九月十九日、扇谷上杉定正が山内上杉氏の玉縄要害を攻略。十月、定正が荒川にて急死し朝良^{ともよし}が家督を継ぐ。

・明応五年(1496)、山内上杉氏家臣の長尾右衛門尉^{うえもののじょう}が相模西部に侵攻し、

小田原城陥落。のちに東郡に転進するため中郡の実田^{さなだ}要害(平塚市)を包囲。

(実田要害はその後、永正元年(1504)十二月に再度攻められて陥落。)

・永正二年(1505)、扇谷上杉氏と山内上杉氏が和睦。長享の乱の終了。

(事実上、扇谷上杉氏の降伏。ただし相模国守護は朝良のまま。)

9-10 永正の乱(永正三年(1506))

[将軍：足利義澄(11代) 古河公方：足利政氏]

・古河公方の地位をめぐり、公方政氏と嫡子高基が争う。

(両上杉は政氏を支援する一方、両者の和解を仲介するものの和戦が繰り広げられる。)

・永正四年(1507)八月、越後国守護代長尾為景が越後守護上杉房能^{ふさよし}を急襲し、殺害。関東管領山内上杉顕定が援軍に赴くものの戦死する。

(この混乱に乗じ伊勢盛時(後に早雲と呼ばれる)が長尾為景と手を組み両上杉氏から離反して相模侵攻を開始。また顕定の家督をめぐり、山内上杉氏内で内紛が発生し、高基支持へ変更。)

・永正九年(1512)六月、足利高基が父の政氏を追いやり古河公方に就任。
(政氏を支持する扇谷上杉氏と高基を支持する山内上杉氏が対立。)

・永正九年（1512）八月十二日、岡崎城（平塚市・伊勢原市）が伊勢盛時により落城。翌日、鎌倉に侵攻。

（大庭要害もこの年に落城する。岡崎城落城のあとか。）

同年十月に盛時が玉縄城の築城を開始。

（扇谷上杉氏の玉縄要害を改修した可能性。）

・永正十年正月、伊勢軍と扇谷上杉氏の合戦で、清浄光寺が焼失。

（藤沢～鎌倉が安定的に支配されていない状況。この時期の東郡の重要拠点は大庭城か。）

・永正十五年（1518）四月二十一日、朝良死去。家督は朝興へ。

（同年伊勢盛時も隠居し、家督は氏綱へ。翌年朝興と氏綱で和睦が成立。）

9-11 その後の扇谷上杉氏

・大永三年（1523）頃、伊勢氏綱が両上杉氏の領地に侵攻。

・大永四年（1524）正月、扇谷上杉氏と山内上杉氏の間で和睦が成立。

（直後、氏綱の調略により江戸城が離反。扇谷上杉、南武蔵の支配拠点を失う。）

・大永六年（1526）十一月、両上杉が相模に侵攻し玉縄城を攻撃するものの、落とせず。

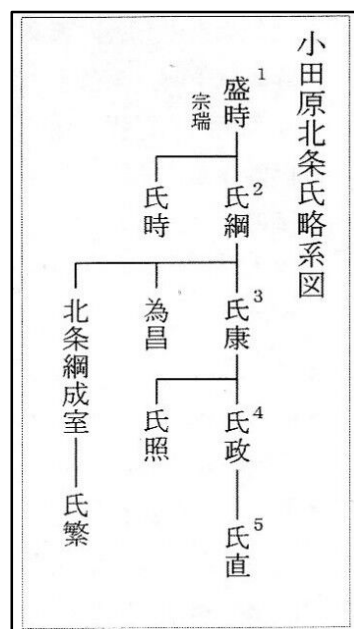
（天文二年（1533）から四年にかけて扇谷上杉氏が相模に侵攻し、焼き討ちをおこなう。）

（扇谷上杉氏最期のあがき）

・天文六年（1537）四月二十七日、朝興死去。家督は朝定が継承。七月、河越城が小田原北条氏により落城。

・天文十五年（1546）四月二十日、河越城奪還を試みるが失敗（河越城合戦）。朝定戦死。

（事実上の扇谷上杉氏の滅亡。）



9-12 玉縄城

・立地

（多摩丘陵の西限、複雑に谷戸が入り込む標高50～80m程の丘陵上に所在。）

丘陵周辺には鎌倉時代以来の幹線道である鎌倉街道の上道・中道がはしっている交通の要所。)

- ・玉縄城の初見『鎌倉大草子』

(長享の乱の際、山内上杉氏の玉縄要害を扇谷上杉定正が攻略。)

- ・永正九年(1512)十月、伊勢盛時が玉縄城築城を開始。

(同年八月十二日に盛時は岡崎城を攻略、翌日に鎌倉に侵攻していることから、この時期に扇谷上杉から玉縄要害を陥落させたか。)

9-13 玉縄城の城主

- ・玉縄城の城主

(城主は歴代一族から選定)

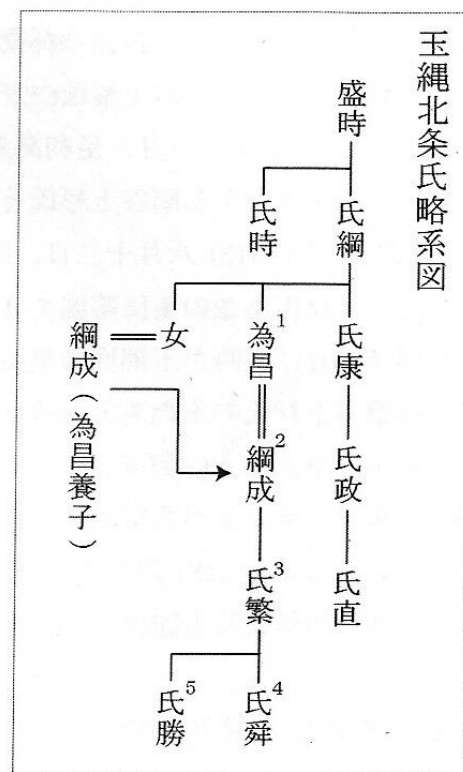
(為昌以降を玉縄北条氏と呼称)

- ・北条氏時(初代玉縄城主)

伊勢盛時の次男。大永六年(1526)

におきた戸部川の合戦に参加していることが知られているが、詳細

は不明。^{きょうろく}享禄四年(1531)に死去。



担当：久保田幸雄

9－14 室町・戦国時代の長後

15世紀末、伊豆・相模を支配したのは北条早雲だ。実は早雲という名は後世のもので、当時は伊勢新九郎盛時といい、出家後は伊勢宗瑞を名乗っていた。

早雲は備中国井原荘（岡山県井原市）の高越山城主、伊勢盛定の子として生まれ、やがて京都の室町幕府將軍足利義尚の申次衆（秘書官のようなもの）となった。

父の盛定は、伊勢氏の庶流のそのまた庶流の家柄だが、伊勢氏本宗家の婿となり、本宗家でナンバー2の立場にあった。その関係で、娘（早雲にとっては姉）が駿河今川氏へ嫁ぐことになる。娘、後の北川殿が、駿河国（静岡県）の国主、今川義忠の妻となり、子（幼名竜王丸、のちの今川氏親）をもうけると、早雲も伯父として今川家より重臣の扱いを受けるようになる。

今川家とのつながりを持った早雲は、今川氏の内乱のさい、姉北川殿の支援要請を受けて駿河に下向。甥の氏親が今川家の当主の座につく手助けをし、今川氏の一門の立場を得た。同時に早雲は、堀越公方足利政知の奉公衆となり、その家臣の立場にもなった。なお堀越公方とは、伊豆国堀越を本拠地とした室町幕府の東国支配機関のことである。

当時、駿河国の隣国伊豆国は上杉家氏の支配下にあったが、国内は内乱状態にあった。すでに60歳になっていた早雲だったが、その俊敏さと官僚的頭脳、武将としての能力をもって伊豆を平定し、小田原城の大森氏を追い出して、相模東部の上杉氏の支配地をも次々と征服していった。ついに岡崎城（平塚市）で三浦導寸を破ると、玉縄城に拠点を移して三浦半島まで平定していった。

早雲の孫、北条氏康の時代はまさに戦国の世で、武田信玄、上杉謙信、織田信長、松平定信（のちの徳川家康）などの強敵に周囲をかこまれる状況にあった。当主氏康は強力な支配体制を構築するために、家臣団名簿を作成する。それが＊『北条氏所領役帳』である。

＊小田原衆所領役帳 と呼ばれ、相模の戦国大名 北条氏康 が作らせた、一族・家臣の諸役賦課の基準となる役高を記した分限帳。原題は不明で、「北条家分限帳」、「小田原北条所領役帳」などとも呼ばれる。全1巻。原本は伝存せず、江戸時代の写本が知られる。氏康期にあたる永禄2年（1559年）の奥書をもつ。後北条氏は、永正17年（1520年）から弘治元年（1555年）にかけて領国内における数度の検地を実施しており、それに基づいて分限帳が作成されたと考えられている。

『北条氏所領役帳』の内容は以下。

- ・侍の所属軍団の区別
- ・侍の名前
- ・知行の役高（軍役や大普請役など）

- ・知行所の地名
- ・その他

『北条氏所領役帳』によると、藤沢市域には、知行主として玉縄城の城主北条綱成ほか16名の侍がいた。長後地域では、七次（高倉の一部で、七ッ木）・千束（高倉の一部）・土棚（土棚・下土棚）の知行主として埴和又太郎こと、埴和氏続の名がある。

氏続の所属軍団は松山衆で、知行高は1028貫675文。知行地項目には、「武蔵国小沢江、相模国中郡沼部江、東郡千束・七木・土棚、安保ノ内鬼石」とある。

松山衆は、武蔵国北方の松山城（埼玉県吉見町）の上田朝直（宋調）のもとに属した侍集団である。朝直は、はじめは扇谷上杉の重臣だったが、あとで後北条氏の家臣となった。

埴和氏続は後北条氏の家臣で、戦国時代から安土桃山時代にかけての武将。はじめは今川氏に帰属していたが、河東一乱に際して後北条氏に加わったと思われる。刑部丞、後に伯耆守と称した。

興国寺城（静岡県沼津市）の城主に登用された氏続は、武田信玄の軍と戦い、配下の侍として、七ッ木・千束の武士15人が興国寺城とともに戦ったとされている。

氏続の子、埴和康忠は、『北条氏所領役帳』に記載の侍560人中、知行役ではトップから10番目の大身の侍で、のちに上野国（群馬県）の国守となっている。

天文11年（1542年）9月、北条氏康は、この埴和氏続に対して、反銭（田地に対する反別の課役）と棟別銭（家の棟数を基準とした課役）等を免除している。その文書に「渋谷荘之内福田之郷・千束・七次・長期」の地名が記されている。これが千束、七ッ木、長後の地名がはじめて資料上にあらわれたものである。

永禄2年（1577年）7月の『北条氏所領役帳』には、埴和氏続の所領として「東郡千束・七次」45貫760文、「同土棚」14貫558文とある。土棚の史料上の初見である。

また、天正14年（1586年）12月、北条氏は小田原城下の京紺屋津田氏に、相模、伊豆の15カ所の地で未納だった紺屋役（藍染業者に対する藍瓶単位にかけた課役）を徴収させている。その文書に「宮原」、「円行」、「七次」のほかに「土棚新宿」とある。この「土棚新宿」とは、おそらく長後の宿（上長後）と思われる。戦国時代は戦闘規模が拡大して軍事行動に必要な伝馬の徴発が増大し、北条氏の領国でも伝馬を担う宿町育成政策がとられ、在地有力者の開発申請により新宿が設置された。

その他の出来事

- ・永享5年（1433年）9月16日、関東大地震発生。
- ・天文5年（1536年）下土棚白山神社創建、村中安穩を祈願して鎮守とする。
- ・天文15年（1546年）長後泉竜寺高吟により中興され、現地に再建される（皇国地誌）
- ・天正10年（1582年）3月11日、織田信長、徳川家康、北条氏政らにより、武田勝頼が天目山にて滅ぼされる。その残党が多数相模国に流入、石川6人衆（西山、内島、佐川、田代、市川、伊沢）、下土棚の川井、高倉の沢野、青木、綿貫、川井などその流れと伝えられている。
- ・天正19年（1591年）5月、セッ木、千束の両村が、旗本川井次郎兵衛久正の知行地となる。11月、下土棚村、旗本竹尾伝九郎元成の知行地となり、さらに地頭を命じられる。

天正年間（1573～1592年）、長後村の一部、旗本朝岡久兵衛泰勝の知行地となり、天領との二支配となる。

参考文献

『図説 ふじさわの歴史』藤沢市

『歴史をひもとく藤沢の資料 6 長後地区』藤沢市文書館

担当：池田純子

1 0 戦国時代

1 0－1 北条早雲の出現

1 0－1－1 伊勢新九郎（北条早雲）の出自

北条早雲はよく、戦国大名のはじめの人といわれる。旧態とした守護大名を倒して、強力な戦国大名の支配する戦国時代を招来した人物という意味である。しかも、実にその生涯がミステリアスで謎に満ちており、不可思議な人物であったのである。そもそも北条早雲という名前自身が、後世に、多分江戸時代初期に、俗書によってつけられたもので、実名ではない。実名は伊勢新九郎盛時、伊勢氏の出である。決して世に喧伝^{けんでん}されているような浪人ではなく、血筋の正しい室町幕府の役人を務める侍であった。彼の故郷は備中国井原荘（岡山県井原市）の高越^{たかこし}山城主の子として生まれた。長じて彼は、名族の子弟が良く務める室町幕府の役人となって京都に入った。ところが当時、応仁の乱が起こり、彼の仕えていた足利^{よし}義視が政争に敗れて、京都を逃げだす事件があった。伊勢盛時も主人に従って伊勢国（三重県）に逃げた。たしかに、ここで一介の素浪人になったのである。北条早雲素浪人説は、実はこの時のことから発生しているらしい。盛時は36歳の働き盛りであった。盛時には一人の妹がおり、実名は不明であるがのちに北川殿と名乗る女性である。その北川殿が、駿河国、今の静岡県^{めいぞく}の国主である今川義忠と結婚した。国主＝守護大名の夫人になるような人の兄が、名族の出でないわけがない。かくして盛時と今川氏とのつながりは成立した。

1 0－1－2 相模への進出

やがて北川殿に子が生まれた。幼名竜王丸、後の今川氏親（今川義元の父）である。盛時はこの頃今川家に仕えていたらしい。盛時は国主の伯父として重臣の扱いを受け、幼い甥の氏親を助けることになった。今川家のお家騒動には、盛時は活躍して、氏親を今川家の当主にすえることに成功した。駿河国の隣の伊豆国は当時、上杉氏の支配地であったが、全く内乱状態で、特に室町幕府の出先機関の堀越公方、足利茶々丸が義弟を殺して家臣が分裂していたため、ひどい状況を

呈していた。盛時は当時すでに60歳、名前も入道名の早雲庵や道宗端^{そうずい}と号していた。官僚的頭脳に加えて武将的能力、そして敏な動き、この三本の力を持った早雲は、伊豆に急襲し、一国を平定、ついで小田原城に目をつけ、相模国へ進出した。明応四年（1494）のことである。小田原城の大森氏頼を追い、関東の支配者上杉氏の内乱につけこんで相模東部の支配地を次々と手中に納めていく。ついに岡崎城（平塚市）で三浦導寸を敗り、玉縄城に拠点を移して、三浦半島を制圧、北条早雲の伊豆・相模平定は終わりをつげた。

10-2 藤沢周辺の武士と郷村

10-2-1 小田原衆所領役帳の成立

永禄二年（1559）二月十二日、北条氏康は、「小田原衆役帳」（以下「役帳」と略称する）を作った。後北条氏は、早雲の在世中より、知行の給与や寄進、恩賞の宛^{あて}行^{おこない}・安堵の場合に、いわゆる「貫高^{かんだか}」表示を採用した。「貫高」表示は、後北条氏の独創ではない。それは、すでに後北条氏の前代の、足利公方や両上杉氏の時代から行われていたものである。しかし後北条氏は、この「貫高」表示を、あらゆる経済現象の基本単位として、統一的に再採用したところに、重要な意味があった。とくに寺社や家臣である武士や職人らに、寺社領や恩給地などを給与したり寄進したり、さらには、それらを再確認（安堵という）したりする場合には、後北条氏は、その「貫高」に、地名をも併記して確實性を附与した。

「役帳」は、衆別に後北条氏の家臣とその高辻（役高）および郷村などを列記したもので、その順序はつぎのようになっている。

小田原衆（34人）・御馬廻衆（94人）・玉縄衆（18人）・江戸衆（103人）・松山衆（15人）・伊豆衆（29人）・津久井衆（57人）・諸足軽衆（20人）・職人衆（26人）・他国衆（28人）・社領（13社）・寺領（28寺）・御家門方（17人）・御家中役之衆（17人）・半役被仰付衆（32人）・小机衆（29人） 計560人

表一1（後北条氏衆別高辻比較表）は衆別にその高辻の概要を表示した。表一2は衆別に、人数、高辻を集計した。

小田原衆・玉縄衆・江戸衆・松山衆・御家門方および三浦衆に高辻の多い家臣が目立ち、御馬廻衆・津久井衆・足軽衆・職人衆および御家中役之衆に高辻の少ない家臣が多いことがわかる。さらに後北条氏の家臣の中核的存在は、「役帳」

の家臣数の半数以上を占める五十貫文以下の高辻をもつ層であり、逆に五百貫文以上の高辻保有者は、わずか二十九名にすぎない。この二十九人のうち、当主氏康の叔父にたる北条長綱（幻庵）が、五千五百四十四貫文と、最高の高辻保有者であり、それにつづいて、松田左馬介・遠山丹波守（綱景）・小机三郎殿（北条氏秀＝上杉景虎）・左衛門太夫殿（北条綱成）・太田新六郎（太田康資武庵）・富永弥四郎（神四朗直勝）・大道寺（駿河守政繁）・左衛門佐殿（北条氏堯）・**埴和又太郎（氏統）** および津久井の内藤左近将監（景豊）の十一人が、いずれも千貫文以上の高辻保有者であった。

10-2-2 ^{はが}埴和又太郎の所領と活躍

「役帳」によると、千束・七木・土棚の領主は、埴和又太郎であった。千束と七木は、現在「高倉」とよばれている。千束は上高倉の地で、その鎮守は諏訪神社であり、七木は七次ともかき、下高倉の地で、その鎮守は七ノ木神社である。また土棚は、江戸期になると、上・下二村に分けられ、上土棚は現在の綾瀬市に、下土棚は藤沢市域内にある。上土棚の鎮守は熊野神社で、下土棚は白山神社である。「役帳」のころは、一村であった。また、**埴和又太郎**の高辻は、「役帳」の全家臣五百六十名中、第十位である。「関八州古戦録」などの軍記によると、天文十五年（1546）四月、河越合戦のとき、氏康は、埴和刑部少輔を「松山にさし置き、守禦の備えを設けなして小田原へ凱旋なり」とあるように、埴和氏をして松山城代に任命している。しかしこの年の八月二十八日の夜、松山城は、岩付城主の太田信濃守資時の攻撃によって、いったん陥落し、埴和氏は河越城走った。しかし太田資時は、そのごまもなく病死（十月九日没）したので、氏康は、ふたたび、松山城を奪い、上田氏をして松山城を守らせるに至った。この松山城攻防の過程で、埴和氏は、武州小沢郷二百八十貫を恩賞として与えられた。「埴和氏文書」には、天文十一年（1542）九月二十六日の氏康の埴和又太郎宛の文書がある。氏康は、古沢北久保・小林・田中などの三ヶ郷の反銭・棟別銭などを免除しているのであるが、これらの各郷は、又太郎の「御附」の所領であった。この文書は、前欠の文書である。その前欠の末尾と思われる文書に、「渋谷庄之内福田之郷、千束七次長後」などの地名が書かれている。この地名は、現在の大和市域の福田と藤沢市域の千束・七次・長後のことであろう。しかも「役帳」に、千束七次と土棚の六十貫三百四十八文が、埴和又太郎の知行地と明記されているのであるから、千束・七次・長後は、又太郎の所領であった。

弘治三年（1557）七月二日、北条氏康は、埴和又太郎の家督継承を確認する証状をあたえた。この年、埴和又太郎は、父の伊予守の一跡を継いだ。したがって

永禄二年（1559）二月の「役帳」整備の時点では、又太郎が、埴和家の正嫡であった。しかし伊予守は、この後も又太郎とともに活躍する。伊予守は、その名を氏続といった。

永禄十二年（1569）正月より三ヶ月余、氏政は、武田信玄と対陣するために、駿河国の薩埴山に出陣した。そのとき埴和伊賀守氏続は、興国寺城主として、氏政のために日夜働き、閏五月三日、その功績によって、今川方の欠所地三百貫を与えられている。「役帳」でみたように、又太郎は千束・七次で四十五貫七百六十文を、すでに与えられている。ところが十二年後に、またここで四十二貫を同心給として与えられた。同心給が与えられているところは、後北条氏の直轄地が多い。もしそれが正しいとすると、この千束・七次あたり、とくに長後は、「役帳」が整備されたころは、後北条氏の直轄地であった。同心一人三貫文としても、伊賀守氏続は、千束・七次で十五人の同心をもっていたことになる。

伊予守氏続は、こののち元亀二年（1571）ごろまで興国寺城の城代であった。とくに六月（元亀二年）には、氏直を助けて敵三千人余を討捕ったという。「埴和氏古文書」には、元亀二年正月十二日と六月二十四日の氏政感状がある。この感状のなかで、埴和「父子」が、さかんに走り廻ったことがのべられているが、その父子とは、伊予守氏続と又太郎（伯耆守康忠）のことではあるまいか。康忠の「康」は、氏康より拝領したものであろう。

埴和伯耆守康忠は、後北条氏の奉行人の一人となった。彼が奉じた虎の印判状は、永禄七年（1564）十月七日のものをはじめとして、天正十八年（1590）六月五日のものにいたるまで二十八点、「常調」の伝馬手形は五点、計三十三点が今日に伝えられている。

天正十八年（1590）正月、小田原城中での大評定に、埴和伯耆守康忠は、宿老衆の一人として参集している。また小田原籠城の人衆中に埴和伊予守と伯耆守の名が見える。七月氏直の高野山入りに従った家臣のなかに、埴和左兵衛尉がいる。しかし、伯耆守康忠や左兵衛尉の小田原城落城以後のことは、よくわからない。

10-2-3 藤沢周辺の領主とその所領

北条綱成・福島左衛門・大谷彦次郎・石川三人衆・坂田・仙波弥七郎および興津殿の七人は、その知行地である在所との関係の密接な領主らであり、岩本定次・関兵部丞・鶴山源太郎・新藤下総守・後藤助次郎・埴和氏続・坂部岡康雄の七人は、在所との関係が、あまり密接でなかった領主らであり、内藤秀行にいた

っては、関係も少なかったといえる。藤沢と江の島をのぞいた、藤沢周辺の領主と所領との関係で特色すべき点はずぎの通りとなる。

第1は、玉縄衆のしめる位置の重要性である。藤沢とその周辺の村々は、玉縄城主とその家臣らと密接に結びついていた。城主綱成の村岡地区にしめる比重は、もちろんであるが、大庭の福島氏、藤沢・川名の太谷氏とその所領は、高辻も多いけれど、それ以上に藤沢周辺の百姓・名主らにとっては、重圧となった。

第2は、表一3には直接あらわされていないが、この表にみえる村々の周辺に、後北条氏の直轄領が、多く散在していたということである。御蔵出の支給状況や紺屋役の賦課などによって、川名・俣野・七木・長後・土棚・宮原・円行・葛原および亀井野・今田などの村々が、後北条氏の直轄地であることをみてきた。後北条氏の当主が、いかに藤沢周辺というより、鎌倉・玉縄以西のこの地を、政治的にも軍事的にも重視したかが想像される。

第3は、第二の直轄領の問題と関連があるが、後北条氏の重臣の知行地が多いということである。岩本定次・関兵部丞・堀和氏統および坂部岡康雄らは、後北条氏の政治を担当した重臣らである。

第4は、近世の村との比較の問題である。藤沢町と片瀬および江の島をのぞくと、この藤沢周辺の村数は、近世では、鵜沼・川名・高谷・小塚・宮ノ前・弥勒寺・渡内・柄沢・大庭・羽鳥・辻堂・亀井野・石川・西俣野・今田・円行・下土棚・長後・千束・七木・用田・葛原・菖蒲沢・打戻・瀬郷・宮原および遠藤の二十七ヵ村であるが、永正九年（1512）の早雲の玉縄築城より、天正十八年

（1590）の小田原落城までのおよそ八十年間の史料に、この二十七の村名が、すべてみえるということである。

第5に、この後北条氏の治下で、藤沢周辺の村々は、そのテンポは、きわめてゆっくりとしたものであり、じょじょに発展していったということである。

第6は、領主以下の層の活躍である。葛原の小泉佐渡守・打戻の和田彦蔵・石川の隅田和泉寺・円行の矢地春四郎・用田の伊藤山城守と角田大和守および渡内の福原氏・石川の六人衆（伊沢・西山・内藤・佐川・円城・市川）・宮原の内藤氏などは、いずれも在郷の名主クラスの小土豪らであったであろう。これらの家々は、小田原落城後も、その故地をはなれることなく、名主や村役人に職についたものが多い。

第7に、領主・名主以下の百姓らの具体的姿は、今日これを事物によって明らかにすることが、まったく不可能である。

10-2-4 中世末期・近世初期の藤沢の旧家

彦坂（小塚）広田・林（宮ノ前）・山下（弥勒寺）菊池・森（大鋸）青木（西富）石井・福原（渡内）山本（片瀬）砂川（川名）岩本（江ノ島）杉山・川島・端山（大庭）伊沢・佐川（石川）杉山（今田）加藤（亀井野）渋谷・飯田（西俣野）金井・堀内・平野（藤沢）三觜（羽鳥）田代・宮崎・青木（遠藤）内野・相原・井上（宮原）亀井（菖蒲沢）小泉（円行）井上（長後）**神山・岩崎**（高倉）

これらの三十余家には、現在多くの史料を伝えているが、そのうちには、「家伝」・「系図」・「由来書」などの家史類をもつ家も多い。おそらくこれらの家々の祖先の人々は、後北条氏時代の約百年間には、後北条氏の本城主および支城主のために、おおいに活躍した人々であったことであろう。そしてこの多くの家々の人々は、玉縄城明け渡し・小田原滅亡という事態に直面して、刀をすて鋸をなげすてて、自らの墳墓の里へ帰農したのであろう。後北条氏の遺臣たちが、戦国の乱世をのがれて、緑濃い静かな「わが住む里」に、落ちつきはじめたころ、新しい封建領主による、きびしい支配は、ひしひしと彼らの身のうえにせまってきた。

参考文献

- 1 藤沢市史 第四巻 通史編 藤沢市 昭和47年（1972）

担当：久保田幸雄

後北条氏衆別高辻比較表

表—1

高 辻 衆 別	1000 貫 以 上	500 貫 以 上	100 貫 以 上	50 貫 以 上	10 貫 以 上	10 貫 以 下	計 (人)
小田原衆	1	4	1 6	8	5	0	3 4
御馬廻衆	0	2	2 4	2 2	4 3	3	9 4
玉縄衆	1	1	7	5	3	1	1 8
江戸衆	4	4	2 8	2 1	3 9	7	1 0 3
松山衆	1	2	1	7	3	1	1 5
伊豆衆	0	2	6	4	1 7	0	2 9
津久井衆	1	0	1	4	1 1	4 0	5 7
諸足輕衆	0	0	1 1	3	5	1	2 0
職人衆	0	0	2	2	1 3	9	2 6
他国衆	0	0	6	4	1 3	3	2 8
社領	0	0	3	5	5	0	1 3
寺領	0	0	5	5	1 1	7	2 8
御家門方	1	0	1 0	4	2	0	1 7
御家中役之衆	0	0	6	5	6	0	1 7
(半役) 三浦衆	1	1	5	4	2 1	0	3 2
小机衆	1	0	5	6	1 6	1	2 9
小計	1 1	1 8	1 3 6	1 0 9	2 1 3	7 3	5 6 0

衆別高辻集計表

表—2

衆別 順位	衆 別	人数 (人)	高辻 (貫文)
1	江戸衆	1 0 3	1 6 7 8 0, 5 2 8
2	小田原衆	3 4	9 2 8 7, 9 7 9
3	御馬廻衆	9 4	8 4 2 6, 5 2 4
4	御家門方	1 7	7 7 6 0, 4 2 8
5	玉縄衆	1 8	4 2 5 7, 2 4 3
6	他国衆	2 8	3 6 1 7, 7 2 7
7	小机衆	2 9	3 4 3 8, 1 9 2
8	伊豆衆	2 9	3 3 9 2, 8 6 4
9	松山衆	1 5	3 3 9 0, 4 2 7
10	三浦衆	3 2	3 3 4 4, 1 8 8
11	諸足輕衆	2 0	2 2 6 0, 7 8 0
12	津久井衆	5 7	1 6 9 7, 2 9 3
13	寺領	2 8	1 2 8 9, 2 6 6
14	御家中役之衆	1 7	1 2 1 3, 7 9 9
15	社領	1 3	1 1 1 3, 2 3 2
16	職人衆	2 6	8 9 7, 9 5 9
	計	5 6 0	7 2 1 6 8, 2 5 9

藤沢周辺後北条氏家臣高辻表

表—3

郷 村 名	高 辻 〔貫〕 〔文〕	領 主 名	衆 別
村岡（上・下）	458, 300	北条綱成	玉縄衆
大 庭	180, 000	福島左衛門	玉縄衆
川 名	48, 432	大谷彦次郎	諸足輕衆
鵜 沼	73, 767	岩本定次	御馬廻衆
辻 堂 羽 鳥	52, 412	関兵部丞	御馬廻衆
石川（三分一）	11, 105	鵜山源太郎	御馬廻衆
石 川	15, 330	石川三人衆	江戸衆
西 俣 野	7, 703	坂田	御馬廻衆
大場向俣野	20, 000	新藤下総守	江戸衆
俣 野 開	15, 440	後藤助次郎	江戸衆
千 束 七 次	45, 760	塀和氏続	松山衆
土 棚	14, 588	塀和氏続	松山衆
用 田	25, 000	坂部岡康雄	小田原衆
打 戻	30, 000	仙波弥七郎	御馬廻衆
瀬 郷	2, 000	内藤秀行	半役被仰付衆
葛 原	10, 000	興津殿	御家門方

1 1 江戸時代

徳川家康は小田原北条氏の滅亡でこれまでの東海地方に代わって関東を所領として与えられ、天正18年（1590）8月1日江戸に入った。家康は秀吉配下的大名中で最大の250万石を領し、小田原に代えて江戸城を中心に関東の経営を行った。秀吉の死後、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで石田三成らを滅ぼすと、家康は、慶長8年（1603）征夷大將軍となり、江戸幕府を開いた。

江戸幕府は全国の道路網を整備したが特に重要視したのは五街道と呼ばれた東海道・中山道・奥州街道・日光街道・甲州街道であった。その中でも東海道は鎌倉時代に幕府と朝廷という二つの政府が生まれたために重要性を増し、それ以来最も重要な街道となった。東海道は江戸の日本橋から京都まで、途中に53の宿場があった。宿場の任務は公用の人や荷物の輸送（伝馬）と宿泊や休息の設備をすること及び通信（飛脚）の仕事だった。宿場の本来の仕事は幕府の命を帯びた旗本など公用の旅行者や大名の旅行のための設備であって、一般の旅行者には一切特別な配慮はなかった。家康は東海道の宿駅（宿場）に公用の輸送のために馬と人足を備えることを命じた。宿場の旅館には公用の旅行者である役人や公家・大名などが泊る本陣・脇本陣があり、宿役人など有力者の家が当てられた。伝馬は、幕府の公用の旅行者が用いるので將軍からの朱印状や老中などが出した証文に必要な人馬の数が書かれている。この数だけは宿場が無料に出さなければならない。さらに大名の参勤交代の場合は、お定め賃銭といわれる公定価格で出すが、これも普通の賃金より安かった。この負担は宿場内に土地や家を持っている人々に割り当てられ、その代りに土地の税や年貢が免除された。宿場の人達には相当な赤字であり、これを商売などで埋め合わせをした。公用の旅行者や大名の宿泊が増えると、百人百疋の人馬では足りないことがある。そこで幕府は、宿場付近の村に命じて不足した分の人馬を提供させる。これを助郷といって幕府の命で割り当てられたが不都合な面が多かった。そこで宿場に近い村々を指定して常時助郷をだす村を定助郷、臨時に大量の人馬が必要な時だけ提供を命じられる村を大助郷とした。宿の中心部からおよそ半径6キロメートル以内が近傍の定助郷となり、それより以遠の村々が大助郷となった。高座郡では七ツ木村、千束村、長後村、土棚村、上和田村が定助郷となり福田村、深見村、用田村などが大助郷であった。（戸塚郷土誌 P168）

1 1 - 1 江戸時代の出来事

天正18年（1590）

7月5日小田原城開城、北条氏滅亡、豊臣秀吉が徳川家康に關八州を与える。

天正19年（1591）

5月七ツ次、千束の両村旗本川井治郎兵衛久正の知行地となる。11月下土棚村、旗本竹尾伝九郎元茂の知行地となる。地頭を命ぜられる。

天正年間長後村の一部、旗本朝岡久兵衛泰勝の知行地となり天領との二支配となる。

慶長5年（1600）

七ツ次、千束の領主旗本川井氏知行替となり両村は幕府支配となる。

慶長19年（1614）

4月18日七ツ次、千束の両村（幕領）旗本遠藤善九郎重次の知行地となる。

寛永2年（1625）

7月27日旗本遠藤善九郎重次、七ツ次村、千束村及び長沢郷開発地計230石を安堵ならびに宛行われる。この頃既に千束村は七ツ木村より分村している。この年長後村の幕領分が、旗本土屋忠次郎利次の知行地となる。

寛永20年（1643）

千束村に慈眼寺が創建される。

正保4年（1647）

下土棚地頭竹尾伝九郎清正、京阪勤番中死去

寛文4年（1664）

下土棚白山神社、広田主水ほか氏子より再建される。

延宝3年（1675）

3月幕府代官成瀬重治、長後村旗本土屋氏知行地に検地施行、9月念仏講供養塔が女性の手により現在の高倉に造立される。

元禄3年（1690）

5月18日下土棚地頭竹尾市郎左衛門元清死去。

元禄7年（1694）

下土棚善然寺炎上。

元禄14年（1701）

下土棚村、旗本竹尾氏の知行地の一部、旗本遠山久四郎安算の知行地となり、同村は旗本2給支配となる。

正徳3年（1713）

7月3日下土棚地頭竹尾伝四郎元奥死去

宝暦元年（1751）

長後天満宮社殿再建。

宝暦2年（1752）

4月上長後村農民興次衛門ほか11名、質地役銭につき奉行所へ訴訟を起す。
この年上長後村に於いて見積反別帳が作成される。

宝暦13年（1763）

下土棚善然寺炎上。

明和元年（1764）

下土棚地頭竹尾仲三郎蔓元死去

安永4年（1775）

下土棚白山神社改築。

天明8年（1788）

下土棚夏刈に四臂金剛像供養塔造立される（矢地光治宅前）。この頃善然寺火災本堂、寺宝、過去帳等焼失する。7月16日善然寺31世弁譽上人入寂。

寛政6年（1794）

5月23日下土棚地頭竹尾喜左衛門元道死去。

寛政8年（1796）

高倉村諏訪社、千束村諏訪社の梵鐘が鑄造される。

文化3年（1806）

下土棚村の地頭旗本竹尾氏の知行分幕領となる。代って松平筑前守地頭となる。この年下土棚柳川五兵衛ほか4人夏刈に八臂青面金剛像庚申供養塔を建設、善然寺祥譽上人（32世）寂。

文化5年（1808）

7月善然寺31世弁譽上人の教えを受けた当時の筆子18人により筆小塚が建立される。

文化7年（1810）

3月下土棚渋谷ヶ原に庚申塔造立される。

文政6年（1823）

長後羽根澤屋旅館開業。

文政8年（1825）

8月下土棚村氏子71名白山神社に梵鐘を奉納する。

文政10年（1827）

12月改革組合村が創立される。藤沢市域では、葛原、用田が深谷寄場、下土

棚、長後、七ツ次、千束村が戸塚寄場に属し、残りの諸村は藤沢宿寄場に属す。
この年2月下土棚小菅新兵衛ほか6人青面金剛像庚申塔を建立。

文政11年（1828）

下土棚渋谷根講中、白山神社に石灯籠1対を寄進する。

文政12年（1829）

角屋、古満屋旅館を始める。

天保3年（1832）

下土棚渋谷ヶ原に広田仁左衛門ほか3人により庚申塔が建立される。

天保7年（1836）

下土棚善然寺、法然上人650回忌の記念事業として山門完成、山門上の竜玉山の篇額の文字は大本山増上寺の冠拳大僧正の筆。

天保8年（1837）

藤沢地域の村々飢饉、下土棚、上土棚の水争い深刻化し下土棚の薩田勘兵衛の弟外負傷者が続出したので、代官江川太郎左衛門に上訴、白山神社（白洲急造）の裁定に於いて下土棚の勝訴となる。

天保11年（1840）

千束村、七ツ木村、旗本遠藤氏の屋敷類焼により見舞金を差出す。

天保14年（1843）

7月長後村上分（旗本土屋氏知行所）名主市郎兵衛、同村下分永明寺への祠堂金差加分の利息近況について、その詳細を明かして欲しいと旗本朝岡氏（長後村下分を知行）に願い出る。

弘化2年（1845）

長後村、夫食救助願を提出。

嘉永2年（1849）

11月長後村と七ツ木村との間に争論発生。

安政元年（1854）

長後村に於いて泉遊居士の石塔建立、発起人の連名帳が作成される。

文久3年（1863）

千束村に於いて農民庄左衛門の潰家跡の相続をめぐり争論が起きる。

11-2 村の生活

江戸時代の全国の土地は将軍の領地である天領と大名領・旗本領に分かれていた。将軍の臣下のうち一万石以上の知行地を持つものが大名で、知行高や将軍

とのつながりによってそれぞれ格式がある。旗本は一万石未満で各自が知行地をもっていた。旗本は御目見得以上という格式をもち、知行所（地）といわれる領地からの収入が生活のもとになっていた。その領地は大体百石以上だったようである。長後、高倉、下土棚の村はいずれも旗本領であった。旗本を地頭と呼ぶことがあり、これらの村はいずれも本百姓（高持）と水呑と呼ばれる二種類の農民がいた。本百姓は地主や自作農、水呑は小作農であった。地主の有力者が領主である旗本から名主に任命された。のちには本百姓の間から選挙で選ばれたり、推薦による所もあったが、世襲で行われるところもあった。名主は村内の行政一般を行なう村の長であった。名主の補佐するものを組頭という。

参考文献

『戸塚区郷土誌』編集者・戸塚区郷土誌編纂委員会 昭和43年（1968）

『中和田郷土』編集者・中和田郷土誌編集委員会 昭和48年（1973）

『藤沢市北部地区郷土史年表』著者・発行 広田俊夫 昭和63年（1988）

担当：久保田幸雄

1 2 明治時代

江戸時代の長後地区は徳川將軍家の旗本の知行地で、長後村は朝岡氏と土屋氏が、セッ木村と千束村は遠藤氏が、下土棚村は竹尾氏がそれぞれ支配していた。

明治維新の廃藩置県により幕府や諸藩による統治ではなくなり、明治新政府による全国を統一する政治形態に移行すると、長後地区は神奈川県高座郡に属することになり、長後村、セッ木村、千束村、下土棚村となった。

明治8年（1875年）、セッ木村と千束村が合併して高倉村になった。またこの年政府の命令で作成が始まった『皇国地誌』（明治13年に編纂完了）によると、江戸時代に上長後と下長後の二村に分れていた長後は、明治維新後に合併して長後村になった。

『皇国地誌』編纂後の明治22年（1889年）の市政・町村制施行による合併で、長後村は渋谷村に属することになり、長後の地名は渋谷村の大字となった。つまり長後、高倉、福田、上和田、下和田と本蓼川の一部が合併して渋谷村になったのである。なお、下土棚は、今田、円行、亀井野、西俣野、石川と合併して六会村（6村が合併したので六会）になった。

『皇国地誌』によると、記載された長後村の戸数は92戸、男性288人、女性が277人、馬8頭で、この馬は農耕馬で農閑期には物資輸送の役目を担ったと思われる。

土地の利用に関しては、田が約19町歩（約57,000坪）、畑が約130町歩（約390,000坪）、宅地が約8町歩（約24,000坪）であった。その他、かなりの広さの山林があり、長後は畑を中心とした純然たる農村であった。

明治政府が殖産興業政策として養蚕業を奨励したため、明治10年頃から新産業として養蚕・製糸業が起こり、長後を中心とする藤沢の北部で発展し、農家のほぼ全戸が農業のかたわらに養蚕を行った。製糸工場も多くできて最盛期の
大正8年（1919年）には工員が約1000人にもものぼり、そのため長後の商店街が大変にぎわった。



持田第二製糸工場

長後の宿場（藪鼻宿）には旅籠屋が5軒（羽根澤屋、古満屋、角屋など）あって、明治維新の時には江戸に攻め上がった長州藩の隊200名が一夜の宿をとったという記録がある。徒歩による大山詣がすたる中、羽根澤屋など羽振りのい

い一部の店が近隣に金銭を貸すなどして、宿場から商店街へと変化させていった。

羽根澤屋は、小菅丹治の指導を受け、明治27年（1894年）11月5日、近代商法による呉服店を開業し、従来からの旅館業を合わせて営業した。

小菅丹治という人物には初代と二代目があり、初代は安政6年（1859年）相模国円行村（現在の湘南台）の野渡半兵衛の次男として生まれ、12歳で上京して東京本郷湯島の伊勢庄呉服店（円行村出身の水島庄兵衛が江戸期に開店した店）に小僧として奉公した。その後、明治14年神田佐久間町の米穀商伊勢屋小菅又右衛門の養子となったが、後に分家して、明治19年（1886年）神田旅籠町に伊勢丹呉服店を開業した。営業努力により20年ほどで、東京の五大呉服店に数えられるほどになった。

また、二代目小菅丹治（1882～1961年）は、山北町出身で旧名は高橋儀平といい、小田原の内野呉服店で一番番頭だったときに仕入れ先の伊勢丹の支配人に認められ、初代の小菅丹治の長女ときの婿養子になった。大正5年（1916年）、初代の死去により二代目小菅丹治を襲名し、昭和6年に新宿に進出して伊勢丹を呉服店から近代的な百貨店に発展させた。

板垣退助が代表の自由民権運動は、自由と民権を国民のものにするという運動で、明治16年（1883年）には長後村でも演説会が開かれ、「真友会」が発足している。

藤沢出身の医師で政治家でもあった平野友輔は、当時、民権家としても活躍中で、活動者の定宿だった羽根澤屋の一室を借りて、明治19年（1886年）に内科と外科の診療所を開設した。なお、明治中期の羽根澤屋店主、青木宗右衛門は、平野友輔も学んだ耕余塾の塾生だった。

明治24年（1891年）10月24日から26日にかけて、秋の陸軍大演習親閲のため明治天皇の行幸があった。藤沢から馬車で渋谷村高倉の井上欣平宅に到着、演習を天覧後に午餐をとり還御する。この明治天皇行幸記念碑「駐蹕之碑」（ちゅうひつのひ）が、高倉の井上欣平氏の庭に建てられている。

12-1 年表

明治元年（1868年）

上長後、下長後の両村が合併して長後村になり。

明治8年（1875年）

11月、セツ木村と千束村が合併して高倉村となる。

明治9年（1876年）

1月1日の人口、長後村戸数99（神社5、寺2）、人口総数565人（男288女277）

明治12年（1879年）

11月、長後村戸長役場を設置。

明治16年（1883年）

10月、長後村で自由民権家有志による「真友会」発足。

明治17年（1884年）

9月県下に暴風雨が襲来、長明学校校舎も破壊され、永明寺に再度移転する。

長後、高倉、福田、上和田、下和田5か村の戸長役場を長後泉龍寺内に置く。

明治19年（1886年）

7月、平野友輔が長後村羽澤屋方で内科、外科、眼科の診療を始める。

明治21年（1888年）

長後、高倉、福田（大和市）、上和田（大和市）、下和田（大和市）および本蓼川の一部（飛び地）を併合して渋谷村となる。

明治24年（1891年）

10月25日、明治天皇、近衛師団の演習統覧のため長後に臨幸、井上欣平氏宅にて休憩。これを記念して明治天皇行幸記念碑「駐蹕之碑」が明治32年（1899年）に建立される。

高座郡内の伝染病患者数163人、死亡者数58人。

明治26年（1893年）

3月、鈴木製糸工場が渋谷村で創業。

明治31年（1898年）

4月長後郵便局開局。

明治35年（1902年）

3月、渋谷村長後に盛進社持田第二製糸場を設立、始業する。

長後村戸数114戸、人口806人。渋谷村戸数630戸、人口4200人。

明治36年（1903年）

6月25日、川井考策が下土棚に製糸場を開設。女工88人、男工11人。

明治37年（1904年）

3月、関口製糸が渋谷村で操業。

明治44年（1911年）

渋谷村で吉川製糸場操業開始。同じく武相製糸揚返場が操業。

参考資料

「歴史をひもとく藤沢の資料 6 長後地区」藤沢市文書館

「藤沢市北部地区郷土史年表」広田俊夫編

担当：池田純子

1 3 大正時代

1 3 - 1 経済・産業・生活

明治期から続く大きな産業・経済活動として製糸業があげられる。明治20年代以降、藤沢市域でも多くの製糸工場が設立された。中でも、鎌倉郡上飯田村に江戸時代より農民として住んでいた持田家。明治10年中頃、当時の当主だった角左衛門は、六会村で座繰りの製糸を始め、その後、機械製糸を開始し、明治22年(1888年)上飯田村に持田製糸第一工場を設立した。さらに明治26年(1893年)には、盛進会という会社を工場内に設け、業務を拡大していった。

明治32年(1899年)に設立された持田第二工場は、大正5年(1916年)には、釜数160、女工人数145人、年間の生糸生産額が12,832斤(約7,700kg)との記録を残している。

経営の拡大などで、息子の持田初治郎は製紙業界の第一人者として称され、地域有数の実業家として知られたが、大正14年の暮れになると経営状況を悪化させた。原因としては、大正9年(1920年)から続く生糸恐慌、同年7月の持田第二工場の火災、大正12年(1923年)の関東大震災などによるものと思われる。

その他の経済活動として、大正2年(1913年)下土棚の川井考策ほか16名の発起人により相模肥料株式会社が設立。

大正5年(1916年)ツルヤ自動車が、長後、戸塚間にバス運行を開始。

大正7年(1918年)合資会社川井製糸場が下土棚にて設立される。

同年、下土棚東側に電灯がともる。曙通りには、和田歯科医院が開業する。

1 3 - 2 関東大震災

大正12年(1923年)9月1日11時58分、関東地方に強い地震が発生した。マグニチュード7.9。神奈川県西部から三浦半島、さらに房総半島先端にかけての地下断層がすべることにより起きた地震である。

関東地方の沖合にある海溝、相模トラフ付近では、フィリピン海プレートと呼ばれる海底の岩盤が、関東地方をのせている北米プレートの下に年間4cmほどのスピードでもぐりこんでいる。その反発によってこの地震は引き起こされた。

断層のすべりは、神奈川県西部の松田町の地下25km付近で始まり、相模湾、三浦半島、房総半島へと毎秒約2.5~3kmの速さで伝わり、約40秒間の揺れが続き、中間地点にあたる湘南地方では、特に激しい揺れを観測した。

この地震による死者・行方不明者は105,385人で、中でも火災によるものが91,781人と最も多く、次に住宅倒壊による11,086人、土砂崩れ・津波では1,013人が亡くなっている。

火災による死者多かったのは、地震の発生時刻が、火を使用する昼どきであっ

たことによる。さらに、この日は台風が日本海沿岸を通過中で、風速 12.3m の南寄りの風が吹いていた。その後台風が東に進むにつれて、風向きが西風、北風と変化し、夜には最大風速 22 メートルまで強まったことで、火災の拡大が加速し、一度燃えた場所が再び燃え戻るというようなことも起きた。

神奈川県死者・行方不明者は 32,838 人で、そのうち 25,201 人と最も多かったのが火災によるもので、その大半が横浜市の人口密集地帯に集中している。

次は住宅倒壊によるもので、5,795 人と、他県に比べて圧倒的に多い。これは、小田原から鎌倉にかけての湘南地方一帯および相模川両岸が、推定震度 7 と最も揺れが激しかったためである（東京は推定震度 6）。

津波による死者は、鎌倉の由比ヶ浜で 100 名、江ノ島の棧橋で 50 名にのぼり、小田原の根府川では大規模な土石流が発生して 64 戸が流出し、約 400 名が死亡している。また、根府川駅に停車中の列車が海中に落下して、300 名が亡くなっている。このように神奈川県は、火災、住宅倒壊、津波、土砂災害など複合的な災害に見舞われた。

長後地区（当時は高座郡渋谷村で人口は 5,609 人）の被害状況を見ると、と、死者 21 名、負傷者 10 名とある（『神奈川県震災誌』（神奈川県、1927 年）。資料によると、この時の世帯数は 786 世帯で、そのうち全焼はなく、全壊が 136 戸、半壊が 159 戸となっている。このように火災の被害がなかったのは、当時、農家では 11 時から 11 時半ごろまでに昼食を済ませるのが習慣になっていたためと思われる。

特に家屋の倒壊が多かったのは、長後四ッ角から大和方面にかけての地下水が浅いところを流れている地域だったと言われている。また、境川にかかる高鎌橋や六会橋が橋脚とともに崩落し、引地川の堤防、戸塚・横浜方面に向かう県道が陥没するなどした。

村が決議した、復旧工事のための県費補助を求める申請では、道路 8 箇所、橋梁 13 箇所、河川 4 箇所の被害箇所があげられている。

当時、農家経済の柱となっていた養蚕業も深刻な打撃を受けた。震災で蚕室が倒壊・破損したため、その後の蚕の飼育はほとんど不可能になった。

製糸業も甚大な被害にあった。最も被害が大きかったのは持田第二製糸工場で、工場 12 棟が全壊、3 棟が半壊し、職工 270 名のうち、男性 2 名、女性 14 名が圧死している。横浜の倉庫に保管されていた輸出用の生糸 2,900 斤（60,900 円相当……大正時代の 1 円は今の 4,000 円）が火災で焼失し、工場内に保管されていた繭 2,000 石（65,900 円）も毀損（きそん）した。

参考資料

『図説 ふじさわの歴史』藤沢市

『関東大震災とふじさわ』藤沢市文書館

『藤沢市北部地区郷土史年表』広田俊夫

担当：池田純子

1 4 昭和時代

1 4 - 1 昭和時代（合併前）の長後

1 4 - 1 - 1 農業

昭和初期の渋谷村は農業が中心的な生業で、養蚕業がこれにつぎ、昭和9年度（1934）の村における農耕地の内訳をみると、水田135町6反、畑625町2反、そのうち桑園284町で畑全体の4割以上を占めていた。

一方で都市の発展が加速し、住宅地とそれに連動する郊外電車が通勤にレジャーにと著しい伸展を見せていた。

昭和16年（1941）12月8日、太平洋戦争勃発。戦争は軍需産業を盛んにする一方で、国民の日常生活必需品の逼迫を招いた。生活必需物資統制令が公布され、主食たる米の配当配給制も実施された。また、食糧増産は戦争遂行のために必要であり農作物の作付けも強制的に割当てられ、収穫した農産物も供出を強いられて、農家の負担と労働は大変なものであった。特に米、麦、甘藷、馬鈴薯などの主食物やこれに準ずる農作物の統制は厳しく、闇売り等の横流しは官憲に厳重に監視された。新長後駅より供出された甘藷の俵が貨車に積まれて京浜方面に盛んに送られた。それでも食糧不足は戦争の進展に伴って深刻となり、山林や荒地の開墾が行われた。相模殖産学校の生徒たちによって下長後、高倉、下土棚の他に南林間、中央林間の荒地や山林が開墾された。

また、航空機燃料の不足が激しくなり、松根油によってこれを補うため新長後駅付近の畑地に小さな工場が建てられ、採取が行われた。

昭和19年（1944）下土棚から円行方面の原にかけて海軍横須賀通信学校が開校し（同年9月に横須賀海軍電測学校と改称）、2万～3万の生徒を収容しきれないため、農家に分宿させた。兵隊や徴用工として多くの青壮年を送り出して閑散としていた長後周辺の農村に活気を与えた。電測学校だけでなく、綾瀬から大和にかけて厚木海軍航空隊もあったので、それらの軍人も大和や長後周辺の農村に居住した。

戦争も終わりに近づくと下長後や土棚の畑に陸軍の高射砲陣地も作られ、米軍の機銃掃射も受けたが、被害はほとんどなかった。

昭和20年（1945）8月15日終戦を迎え、戦後の民主化の一環としてGHQの司令により昭和22年（1947）～昭和25年（1950）に農地改革が行なわれた。地主と小作人の争いがしばしば報道されたが、長後ではそれが表面化したものは少なく、土地所有量は一町歩～二町歩と平均化された。

この頃になると農村にも復興の気運が起こり、畑作にも新作物が導入されて、これまでの主食一点張りの農業に変化が現れた。

昭和28年（1953）の渋谷町の畑地利用の割合は、畑作地540町歩に対し、甘藷56%、陸稲30%、蔬菜5%、西瓜4%、果樹1%、その他4%となっている。他には政府の援助もあり煙草も作られるようになり、農家にはその乾燥蔵が建てられた。

1 4 - 1 - 2 鉄道

昭和2年(1927)小田急電鉄江ノ島線の敷設計画が発表され、予定線は、大和村、渋谷村、六会村を経て藤沢に至る東部線と、綾瀬村、御所見村、小出村を経て辻堂に至る

西部線が想定され、関係村の争奪戦が激化した。渋谷村、六会村の村長の猛烈な誘致運動により、東部線の敷設が決定された。この出来事は渋谷村の都市化への大きな起点となった。

村内には高座渋谷駅が、長後商店街のある六会村下土棚には新長後駅が設置されることになった。新長後という駅名については、駅の所在地が下土棚であったためであった。

昭和3年(1928)小田急電鉄小田原線が開通し、翌年4月、江ノ島線も開通した。総工費2千3百万円余で、片瀬江ノ島、新宿間の運賃は95銭、所要時間は1時間33分。開通2年目の藤沢、新長後間の年間利用者数は2万人であった。

昭和33年(1958)商店街として知名度の高い長後の呼称を使用して欲しいと商店主たちの要望により、長後駅と改称された。



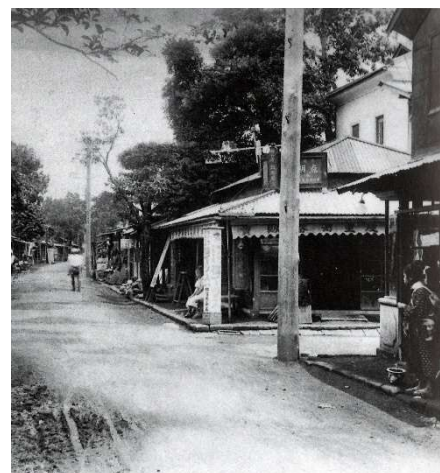
新長後駅

1 4 - 1 - 3 商店街

交通機関の発達や都市インフラの整備により商店街には書店、新聞店、文具店、ラジオ店、写真館、ビリヤードなどの新たな業種の店舗が進出した。また、昭和9年(1934)には三業組合(芸者屋、料理屋、待合茶屋)が発足し、商店街は30軒以上の料理屋などが並ぶ花柳街となった。

商店街の店主達は様々な催事を主催して都市文化の担い手でもあった。高座郡、鎌倉郡の6か村の青年達による高鎌雄弁大会や様々な趣味の同好会も生まれ、近隣からも参加者を集めた。映画や芝居は長後座や繭乾燥場(現在横浜銀行駐車場)で上映されていた。

この頃の長後を「高座郡の中部らしい町として只一つの存在を示すローマンズの町」として昭和7年(1932)7月5日の横浜貿易新報(現神奈川新聞社)で紹介している。



相模薬局

商店街の発展は人々の自意識も高め、当時の商店の広告や看板には「高座郡長後町」との表記が散見され、営業上の利点も考えて「渋谷村長後」ではなく、「長後町」を自称していたのであろう。昭和9年（1934）には長後商工会が組織された。

昭和16年（1941）太平洋戦争勃発、昭和20年（1945）終戦を経て、昭和25年（1950）の朝鮮戦争に伴う特需景気で長後商店街も活気を取り戻し、昭和29年（1954）には七夕祭りが開催された。

商店街は空間的にも拡大し、長後クラブ、パチンコ店などの幅広い世代を対象とした娯楽施設や百貨店のような複数の店舗が出店する集合店舗も誕生した。また、花柳街ともなっていた商店街から料亭などは姿を消して飲食店、美容室、理容室、電気店などの出店が目立っている。



羽根澤屋呉服店

1 4 - 2 昭和の大合併

昭和28年（1953）政府は、地方自治体の財政基盤の強化と行政責任の明確化・能率化・市町村優先の原則を目的として町村合併促進法を制定した。

藤沢市は、昭和29年（1954）2月に渋谷町、御所見村、小出村、綾瀬町、同6月に寒川町、同7月に有馬村へそれぞれ合併を申し入れた。

その狙いは、食糧供給地となる農地と、将来の「文化住宅都市」の建設用地を確保するためであった。

申し入れを受けた綾瀬町と寒川町は合併気運が盛り上がり、有馬村は海老名町との合併に動いた。小出村は、遠藤が藤沢市に、他地域は茅ヶ崎市に分村合併を選択し、御所見村は藤沢市との合併を決断した。

渋谷町には藤沢市だけでなく、市制施行を狙う大和市からも綾瀬町を含めた3町合併の申し入れがあった。

井上金貞渋谷町長は農村同士の合併には否定的で藤沢市との合併が必要と考えていた。

この当時の渋谷町の町勢を見ると、長後・高倉940世帯5,400人、その他906世帯5,004人、面積比では長後・高倉4.10平方軒、その他8.31平方軒であった。

渋谷町が合併問題に取り組まざるを得なかった理由としては、町の規模からして長期的自立の困難性、合併特例活用の財政の再建「5年間の交付税の交付」、急激な町勢の発展による体制整備の必要であった。合併形態もいろいろ検討されたが、藤沢市が積極的であり有利な条件を提示していた。

昭和29年（1954）2月11日、藤沢市は渋谷町に正式に合併申入れを行った。

渋谷町は同年 7 月 7 日に井上町長の私案の形で合併条件を提出したが、7 月 9 日、藤沢市は合併条件受諾を回答した。しかし、町内には農民を中心に藤沢市との合併に反対する者も多かった。井上町長の合併交渉を、町民の意向を無視していると憤慨した反対派の町民は、渋谷町町政刷新連盟（代表本田弥一）を結成し、10 月 16 日、井上町長のリコール請求の手続きをするに至った。

一方、藤沢合併派の町民（南部の長後、高倉）は 3,000 余の署名を集めて、10 月 20 日、町議会に藤沢市との合併請願書を提出した。以後、両派の対立は日を追って険しくなった。

11 月 19 日町政刷新連盟は 2,194 名のリコール署名を町選管に提出した。これに対して井上町長は 11 月 30 日緊急町議会を開いて、藤沢市との合併に関する議案を提出、賛成 14、反対 6 で議決してしまった。これを知った反対派町民 300 余人が役場を取り巻いて氣勢を上げ、大和署から 20 余名の武装警官が出動し待機する騒ぎになった。この時、反対派町民 5 人が関根欣平助役監禁の疑いで逮捕され、それを奪還しようと 100 余人の反対派町民が駐在所を取り囲んだ。5 人は取調べ後、同夜釈放された。

町長が「一晩考えさせてくれ、12 月 2 日朝 10 時に回答する」と答えて、騒ぎはひとまず納まったが、町長はその後、姿をくらまし、藤沢合併派の 14 町議も雲隠れしてしまった。一方、反対派は県知事に陳情書を提出し、また、議会解散のためのリコール運動に入る構えを示した。

渋谷町の混乱をよそに、12 月 14 日藤沢市議会は「渋谷町、御所見村を編入することについて」の宣言議決を革新議員団などの反対を押し切って可決した。こうして、渋谷町議会の議決と合わせて、両市町の合併のための第一歩が踏み出された。しかし、渋谷町内部の対立はますます深刻化し、12 月 21 日定例町議会に姿をあらわした町長は、取り囲んだ 300 人ほどの町民の前で辞意を表明した。12 月 29 日、県が示した住民投票などを内容とする斡旋案を両派共に一度はのんだ。しかし、両派の激しい運動が展開される中で、関根助役が関水教育長に殴られて一時危篤状態になるなど緊迫した状況により住民投票は中止された。

その後、問題は県審議会に一任され、昭和 30 年（1955）1 月 10 日、審議会の調停により、分町を決定した。渋谷町のうち長後・高倉（戸数 1,011 戸、人口 5,353 名）は藤沢市と合併し、上和田・下和田・福田・本蓼川は 2 月 1 日から「渋谷村」として残ることになった。なお、渋谷村は翌年 9 月 1 日、大和町と合併した。

町村合併に対する長後町の賛否両論

当時、長後町町頭として活躍していた吉野花三さん（金物店経営）は「長後は藤沢の最北の地だ。端の方だからといって市長から忘れられては困る」と市長に提言し、「藤沢市は三十年からの大木だ」その大樹に身を寄せたらと説いた。

（「長後だより」昭和 52 年 7 月 10 日号）

長後の仲亀さんは昭和 29 年 8 月 10 日の「渋谷広報」に「某市より相当額の結納金が約束づけられたからといって浮き足立ってはならない。急ぐあまり、町民に対する事前の説明会も行われず、町会の議決のみに従って合併の決定がな

されるのは、議員諸氏の代表権の濫用で絶対に慎まなければならない」と寄稿している。

1 5 昭和時代（合併後）・平成時代

1 5－1 街づくり

昭和 30 年（1955）合併時 5,353 人だった人口は昭和 46 年（1971）4 月には 21,430 人、6,007 世帯となり、市の人口の 1 割を占めるようになり、住民構成では、農業 10%、商業 30%、サラリーマン 60%となった。従来の住民（20 年以上居住）が約 30%で、新住民の占める割合が高くなり、住民間の意思疎通が求められるようになった。

昭和 46 年（1971）9 月、長後地区は自治省からモデルコミュニティ地区に指定された。19 名のコミュニティ推進委員が選出され、施設整備計画及び活動計画について、住民の要望を取りまとめ、昭和 47 年（1972）10 月、次のような陳情書を市長に提出した。

- ① 地区集会所（公民館）の建設
- ② 運動公園の設置
- ③ 青少年施設の設置
- ④ 市営保育所の設置
- ⑤ 畑地灌漑用水路多様化利用

だが、19 名の委員の活動だけでは住民への浸透がしにくいため、昭和 49 年（1974）4 月、長後地区自治会連合会を活動母体とし、活動資金の援助も受けて、地域の学識経験者、各種団体長と自治会連合会の役員を加えた「長後コミュニティ委員会」が発足した。発足以来平成 13 年（2001）まで 25 年間の活動により長後地区の街づくりの基礎が築かれた。その実績は次のようなものである。

- ① 駅東側に 450 台の自転車置き場設置
- ② 自転車等放置禁止区域内に放置されている自転車等の保管場所設置（850 台収容 長後 77 番地）
- ③ 畑地灌漑用水路を利用し歩行者専用道路
- ④ コミュニティホールの建設
- ⑤ 県立高校（現藤沢総合高校）の誘致
- ⑥ 市営住宅跡地に市民センターの臨時駐車場設置
- ⑦ 長後市民センター・公民館の全面改築
- ⑧ 高倉中学校の建設
- ⑨ 市民の家建設（高倉・下土棚・滝山・セツ木）
- ⑩ 長後子どもの家建設
- ⑪ こぶし荘建設
- ⑫ 県道用田・高倉線開通
- ⑬ 県道藤沢・座間・厚木線拡幅

⑭ 長後駅東口土地区画整理事業

コミュニティ委員会の活動と並行して、藤沢市では長後の交通問題、生活道路、下水道、公園などの整備計画に着手し、昭和 59 年（1984）4 月、市民センターに街づくりの為に推進対策室を設置した。翌年にはコミュニティ委員会から委員も加わり、「長後地区整備促進協議会」（期限付き）が発足し、推進対策室は昭和 61 年（1986）4 月、長後地区整備事務所として駅東口（高倉 611 番地）へ移転した。また、「長後地区整備促進協議会」は平成 13 年（2001）の期限切れに伴い、コミュニティ委員会と合併して「長後地区整備促進委員会」と改められた。

これまでに整備された主なものを挙げてみる。

- ① 県道横浜・伊勢原線、善行・長後線
- ② 公園（滝の上・渋谷の里・新屋敷・上高倉）
- ③ 富士見台小学校と長後中学校の間の道路拡幅
- ④ 下水道整備
- ⑤ 長後駅東口土地区画整理事業
- ⑥ 長後駅東口駅前広場・駅前通り線
- ⑦ 長後駅西口広場拡幅
- ⑧ 市民センター裏の土地利用

長後の街づくりを地域主体で進めるために、地域の問題を地域の人々が話し合い、要望・提案をする場として、昭和 56 年～平成 9 年（1981～1996）まで「市民集会」、平成 10 年～20 年（1998～2008）まで「くらし・まちづくり会議長後」。平成 21 年～24 年（2009～2012）まで開かれた「長後地区地域経営会議」は地域住民の意思決定機関で、地域の状況に合わせた様々な事業が実施出来るように権限も予算も持つものであった。平成 25 年（2013）から現在まで続いている「長後地区郷土づくり推進会議」は権限、予算は持たず、地域の課題を市に提案する事を主な役割としている。

1 5 - 2 長後商店街

昭和 25 年（1950）半ば以降、長後、高倉地区では宅地化が進行し、昭和 30 年（1955）時点では所帯数 1011 のうち、給与所得者が半数以上の 546 を占めるようになった。新たな住民を顧客に取り込みながら、高度経済成長下で商店街も発展を遂げていった。七夕まつりがこの年から始められた。

昭和 43 年（1968）の神奈川県商工指導所の調査によれば、店舗数は 195、戦後以降の出店が 6 割を占めている。

そして、昭和 44 年（1969）に、ほてい屋百貨店（後のユニー）ができた。また、創刊されたタウン誌「長後だより」を地元商店や事業所の広告料で支え、地域のコミュニティ活動にも大きく貢献している。だが一方で、近隣に大型スーパーの出店や、狭い道路など商店街としての問題点も神奈川県商工指導所から

指摘されている。

昭和 46 年（1971）、7 月号の長後だよりに地区の議員から寄せられたこんな記事がある。「藤沢市の北部で一番人口の多い長後も最近の交通事情の悪化から商店街へ通じる道路は狭く、混雑ははげしくなるばかりです。横浜市営地下鉄や相模鉄道も湘南台に乗り入れが決まったようです。今こそ、長後に住む人として、自分達の私利私欲でなく、長後の町を発展させる計画について、大所高所から考えてみる時だと考えます」（要旨）。

人口や車の交通量も増加する中、商店街の課題は狭あい道路であった。車の乗入れを禁止して、日曜日の歩行者天国や、地元の消費者と長後商工会との話し合いも行われ、良心的な小売店を育てようと主婦が選ぶ「消費者推奨の店」のプレートを店頭に掲げるユニークな取組みも行なわれた。この取組みは NHK の取材も受けた。昭和 54 年（1979）四つ角に駐車場を設け、同 59 年（1984）には商店街に内在する難問を解決して活性化を図るため、長後商店街協同組合に「長後まちづくり委員会」が発足した。

昭和 61 年（1986）には長後商店街協同組合主催による「第一回長後まつり」が開催された。このお祭りは商店街だけでなく、地域全体のイベントとして根付かせたいと企画され、総檜の神輿（製作費三百万）に各商店の名入の弓張提灯 48 個が吊り下げられ、「万灯神輿」と命名されて街を練り歩いた。（長後まつりは令和 2 年（2020）年まで開催され、現在、万灯神輿は「羽根澤屋資料館」（本店内）に陳列されている）

またこの年、多様化する消費者ニーズに対応するために藤沢市商店会連合会主催の消費者との懇談会も行なわれたが、ここでも道路問題が大きなテーマであった。

この問題を解決するため、平成元年（1989）中小企業庁のコミュニティマート構想の指定を受けて、銀座通り商店街では各店がセットバックして両側 1、5m の歩道が設けられ、車道も再舗装されて「あい・もーる商店街」と名称も新たになった。併せて、貸ホールや休憩所なども備えた 2 階建のコミュニティホール（平成 8 年に長後商店街会館と改称）も完成した。

平成 2 年（1990）4 月、道路事情で途絶えていた泉龍寺の「花祭り」が 33 年振りに復活し、白象行進と稚児行列が歩行者天国のあい・もーる商店街で開催された。

平成 3 年（1991）長後駅一日の乗降者数は 52,701 人と過去最高となったが、その後は減少に転じ、平成 11 年（1999）湘南台に横浜市営地下鉄、相模鉄道乗り入れ後は 3 年で 2 割減少した。平成 14 年（2002）小田急線快速急行は湘南台駅に停車し、長後駅には停車しなくなった。

平成 12 年（2000）、長後駅東口駅前の整備も進み、新しい道路、バス路線の変



更など人の流れも変わる中、その変化を街の活性化にどう結び付けるかが課題となった。また、各商店も世代交代の時期を迎え、後継者問題も浮上した。

平成 14 年（2002）、空き店舗が目立つようになったあい・もーる商店街には「商店街活性化空き店舗活用支援事業」の認可を受けてヘルパー派遣や介護相談などを業務とする福祉事業所が開設された。その後、「ぽ・ぽ・ぽ庵」など空き店舗は高齢者憩い場として利用されるようになった。

この高齢化社会のニーズに合わせ、平成 15 年（2003）、商店街では消費者の自宅に商品を届ける「長後ふれあい宅配便」をスタートさせた。その他、地元農家と連携して「ひまわり祭り」、「ふるさとまつり」の長後寄席、「まちかど音楽祭」なども開催された。しかし、活性化する湘南台、高座渋谷の狭間で沈静化が進むばかりであった。

そこで、長後の発展は長後商店街の活性化にありと、地元の有志が立ち上り、平成 16 年「長後地区活性化推進協議会」が発足した。地元野菜の販売、フリーマーケット、各商店の目玉商品販売などの日曜市、「あい・もーる夏祭り」など開催された。その他にも商店主と農家との連携「長後塾」も立ち上り、黒米づくりと販売、映画会なども開かれた。

平成 22 年（2010）、建物の老朽化と、営業不振でピアゴ（元ユニー）が 40 年の歴史に幕を閉じ、商店街には大きな痛手となった。

平成 21 年（2009）発足した「長後地区地域経営会議」活性化部会では、平成 23 年（2011）空き店舗を利用した地産地消イベント「長後を食べよう」開催、平成 24 年（2012）、空き店舗に高齢者のくらしサポート事業「安心安全ステーション」を開設した。平成 22 年（2010）長後地区の高齢化率は 26.63%となり、高齢者の買い物難民も増え始めた。

昭和 37 年（1962）長後銀座通り商店街（現あい・もーる商店街）には 50 の商店が軒を連ねていたが、シャッターを降ろした商店は住宅へと変わり、平成 29 年（2018）あい・もーる商店街の商店数は 26 となった。

1 5 - 3 農業

昭和 30 年（1955）の長後の全所帯 989 に対し、給与所得所帯 546、専業農家 125、兼業農家 115 で、農業に携わる所帯の約 2 倍になっている。

昭和 31 年（1956）には畑地灌漑用水路が完成し、引地川や境川の改修も行われ、動力耕運機などの普及により農家も大きく進展するかに見えた。だが、都市部の工業化が進み人手が求められ、農業より割の良い給料が得られる仕事へと人々の関心が移っていった。

昭和 35 年（1960）下土棚畑地灌漑地区にいすゞ自動車新工場の進出が決定し、土棚の多くの農家は広大な土地を手放し、兼業農家は増加の一途をたどった。

戦後、交通事情も良くなり、都市部へも自由に通勤出来るようになると、長後周辺には宅地を求める人も多くなり、地域の住宅化が進んだ。これは藤沢市の都市計画において、住宅地域に指定されたことも大きな要因であったと思われる。

その都市計画は農業の都市化、近代化に向けられたものでもあった。今まで人力や牛馬に頼っていた農作業や運搬は機械化され、農業の担い手も「ジイチャン、バアチャン、カアチャン」になりつつある状況も踏まえ、その必要性は大きくなった。

また、栽培作物も米、麦、さつま芋が農業の中心であったが、それに変わり、果樹や葉菜類の生産が増加した。

藤沢では大正元年より砂質地帯の南部で桃や梨の産地化が進んでいた。

長後の梨栽培は、戦前から桃や梨の栽培をしていた井上松之助氏が昭和 23 年（1948）、戦後いち早く梨芽接苗をして梨栽培を復活させた。長後は県の梨主導地になり、周辺地域に普及していった。昭和 27 年（1952）湘南果樹組合が発足し、井上松之助氏は会長になった。

昭和 30 年（1955）梨栽培は火山灰土地帯の台地の風土と耕作経営に適応性が高く、既に渋谷町では約 4 ha の梨園が成木に達して「湘南梨」の銘柄で本格的な出荷が始まった。

昭和 33 年（1958）梨の無袋栽培が始まり、昭和 35 年（1960）長後果樹青年研究会が発足した。

昭和 40 年（1965）の藤沢市の農作物栽培面積を昭和 25 年（1950）比較で見ると、麦類、芋類は 60%減少、果菜類は 10 倍超、葉菜類も 7 倍を超えている。

昭和 42 年（1967）高倉の梨農家はぶどうを導入して果樹経営の複合化を進めている。

昭和 44 年（1969）米の生産過剰から稲作転換対策が始まり、果樹栽培へと移行する農家も増え、同年、梨の新品種「新水」「幸水」「豊水」を既存品種に高接更新も始められて、梨の品種も増えた。

昭和 45 年（1970）藤沢北部農業地帯に園芸を始める農家が増え、昭和 47 年（1972）には長後の井上重喜氏が温室経営（夏季は草花、冬季はシクラメン）を開始した。

昭和 48 年（1973）長後地区 10 軒の農家が合わせて 2 町歩の畑にぶどう（紅富士）を植え付け、昭和 50 年（1975）に結実させた。同年、「巨峰」などの大粒ぶどうを長後、高倉、柄沢の農家 14 戸が水田転作で 1.2ha 新植。

その後「竜宝」も栽培され、昭和 60 年（1985）には高倉の青木一直氏がぶどう大粒種「藤稔」を育成して品種登録し、同 61 年から市内農家に普及していった。藤沢のぶどうとして売り出された「藤稔」の品種名は藤沢の「藤」と一直氏の父の名「稔」に因んでいる。平成 16 年（2004）一直氏は「藤稔」と「ルビー奥山」の交配品種「宝寿」を完成させた。

平成 21 年（2010）直売方式による長後の果樹農家は 28 戸を数え、梨、ぶどうの他、苺、柿、洋梨など観光果樹園としてフルーツの街長後を定着させた。

平成 27 年（2016）に完成した上高倉公園の園路は梨とぶどうの形がモチーフとなっている。

担当：清水茂代

1 5－4 長後の歴史年表（昭和時代～平成時代）

昭和元年（1926）

- ・従来藪鼻と呼ばれていたがこの頃より長後となる

昭和2年（1927）

- ・3月9日 小田急江ノ島線相模大野～藤沢間の敷設計画決定
- ・長後局電話取扱開始

昭和4年（1929）

- ・4月1日 小田急江ノ島線開通（駅名新長後）

昭和7年（1932）

- ・鈴木病院（現湘南台病院）落成診療開始

昭和19年（1944）

- ・10月3日 渋谷村町制施行

昭和20年（1945）

- ・8月30日 マッカーサー連合軍最高司令官、厚木飛行場到着、長後經由横浜に入る

昭和23年（1948）

- ・藤沢警察署長後派出所設置

昭和24年（1949）

- ・7月29日 相模殖産学校長渡辺信雄の頌徳碑建立

昭和30年（1955）

- ・4月5日 小出村遠藤、御所見村、渋谷町長後高倉を編入して新しい藤沢市誕生

- ・長後支所開設

- ・7月7日 長後商店銀座会で七夕祭り開催

昭和31年（1956）

- ・長後支所に中央図書館長後分館開設

昭和32年（1957）

- ・1月 水道工事に着手（長後、高倉）
- ・11月21日 水道通水式挙行

昭和33年（1958）

- ・4月1日 新長後駅を長後駅と改称

昭和35年（1960）

- ・7月1日 藤沢警察署長後駅前派出所設置

昭和36年（1961）

- ・4月21日 米軍ジェット機が高倉の人家に墜落し死者2名、火傷者1名、負



藪花消防団

傷者 1 名の被害

- ・ 11 月 1 日 いすゞ自動車藤沢製造所操業開始

昭和 38 年 (1963)

- ・ 市消防署長後出張所開設 (長後行政センター併設)

昭和 39 年 (1964)

- ・ 長後仙元塚百年祭の記念碑建立祝典開催

昭和 40 年 (1965)

- ・ 10 月 31 日 藤沢電報電話局長後分室開業
- ・ 12 月 2 日 長後誌編纂委員会は文教民生常任委員会に郷土史編纂についての補助金申請

昭和 41 年 (1966)

- ・ 11 月 7 日 小田急電鉄江ノ島線湘南台駅開業

昭和 42 年 (1967)

- ・ 長後史誌発行
- ・ 長後駅橋上駅舎に改築 (西口開設)
- ・ 新県道藤沢町田線開通 (藤沢一大和)

昭和 43 年 (1968)

- ・ 5 月 8 日 長後支所 3 階建ての新館落成、長後行政センターと改称
- ・ 中央図書館長後分館を廃止して長後図書室を長後行政センター内に開設

昭和 44 年 (1969)

- ・ 7 月 「季刊長後だより」創刊
- ・ 7 月 「子どもホーム」行政センター内に開所
- ・ ほていや百貨店 (後のユニー) 開店

昭和 45 年 (1970)

- ・ 「長後地区河川をきれいにする市民の会」発足
- ・ 中高倉歩道橋完成
- ・ 新県道高倉用田線開通

昭和 46 年 (1971)

- ・ 5 月 保健衛生ステーション、長後行政センター内に併設
- ・ 9 月 自治省よりモデルコミュニティ地区に指定される
- ・ 12 月 下土棚が六会地区から長後地区に編入
- ・ 神奈中ボーリング場 (現ミアクターナ) オープン

昭和 47 年 (1972)

- ・ 1 月 「モデルコミュニティ推進委員会」発足

昭和 48 年 (1973)

- ・ 4 月 長後行政センターから長後市民センターと改称
- ・ 「長後だより」日本善行会 (東龍太郎会長) より感謝状、全国広報紙コンクール佳作入賞

昭和 49 年 (1974)

- ・ 「長後コミュニティ委員会」発足

- ・11月 長後地区社会福祉協議会、全国表彰
- ・11月 第一回市長との対話集会
- ・引地川へ鯉放流

昭和50年(1975)

- ・4月「下土棚保育園」開園(下土棚1014-1)
- ・5月 長後市民センター図書室が中央図書館分館としての長後市民図書室に
- ・天満宮入口に「長後老人憩の家」完成(長後1489)

昭和51年(1976)

- ・5月 「高倉市民の家」(さいかちの家)完成(高倉495-1)

昭和52年(1977)

- ・1月 「さいかち公園」開設
- ・3月 第一回市民集会開催
- ・4月 「下土棚市民の家」完成(下土棚1655-1)
- ・11月19、20日 第一回ふるさとまつり開催

昭和53年(1978)

- ・「長後音頭」のレコードについて判明(長後だより1月号)

昭和54年(1979)

- ・10月 「ふるさとまつり」のキャッチフレーズ公募で下土棚西、小菅和子さんの「つなごう手と手 つたえようふるさとの心」に決定

昭和55年(1980)

- ・4月 非常用広報無線塔7ヶ所設置(長後市民センター、長後小学校、富士見ヶ丘、四辻大塚、長後、上合、白山神社)
- ・畑地灌漑用水路跡地に長後北歩行者専用道路完成
- ・境川サイクリングコースのいちょう団地から高鎌橋までが完成

昭和56年(1981)

- ・4月 畑地灌漑用水路跡地に長後南歩行者専用道路一部開通
- ・9月 長後高校建設予定地(代官山)から縄文土器発掘

昭和57年(1982)

- ・2月 「滝山市民の家」完成(長後1183-1)

昭和58年(1983)

- ・身障者ケア付住宅「あゆみ荘」完成(高倉446)
- ・「長後コミュニティ委員会」地域活動の功績により市より表彰

昭和59年(1984)

- ・4月 「長後地区まちづくり推進対策室」長後市民センターに開設
- ・4月 藤沢北警察署開署
- ・長後だより編集委員会「ふるさとの風土物語」発刊

昭和60年(1985)

- ・4月 コミュニティホール開館
- ・全国優良公民館のひとつに長後公民館表彰
- ・住民手作りの「長後ふるさとマップ」発行

昭和 61 年 (1986)

- ・ 2 月 「七ツ木市民の家」完成 (高倉 972-2)
- ・ 4 月 5、6 日 第一回「長後まつり」万灯神輿初担ぎ

昭和 62 年 (1987)

- ・ 「滝の上公園」完成
- ・ 高倉の青木一直さん、ぶどう「藤稔」の育種に成功
- ・ 長後座間線歩道完成
- ・ 長後座間線歩道整備に伴い仙元塚改修
- ・ 長後地区整備事務所高倉 611 番地に移転

昭和 63 年 (1988)

- ・ 4 月 第一回市民センターの「さくらを観る会」
- ・ 7 月 「郷土史年表」広田俊夫さん自費出版

平成元年 (1989)

- ・ 4 月 湘南台地区自治会発足し、長後地区から 11 自治会が分離
- ・ 8 月 藤沢北郵便局舎完成 (高倉 1220)
- ・ 長後銀座通り商店街に歩道完成、名称も「あい・もーる商店街」と改称

平成 2 年 (1990)

- ・ 4 月 横浜伊勢原線に高倉バイパス開通
- ・ 11 月 長後子どもの家「わんぱく城」完成 (高倉 2195-1)

平成 3 年 (1991)

- ・ 「長後音頭」の歌と踊り完成

平成 4 年 (1992)

- ・ 7 月 藤沢北消防署長後出張所、長後市民センターより移転 (長後 163-1)
- ・ 12 月 長後市民センター改築工事開始



古久屋

- ・ 12 月 善行長後線、下土棚地区の一部開通

平成 5 年 (1993)

- ・ 7 月 境川系統下水道の一部使用可能
- ・ 善行長後線開通

平成 6 年 (1994)

- ・ 「渋谷の里公園」完成
- ・ 4 月 藤沢湘南台病院に藤沢ケアセンター開設

平成 7 年 (1995)

- ・ 4 月 長後市民センター新館完成、福祉窓口開設

平成 8 年 (1996)

- ・ 1 月 長後市民センター駐車場完成
- ・ 4 月 「新屋敷公園」完成

- ・4月 放置自転車保管場所完成（長後 77 番地）
- ・10月 新長後第1自治会、半透明ごみ袋導入のモデル地区に指定
- ・11月 「長後コミュニティ 25 年のあゆみ」発刊
- ・「上高倉のむかし」（編集責任者広田清一さん）出版

平成 9 年（1997）

- ・4月 長後地区下水道普及率 85%となる
- ・7月 下土棚に北部方面老人福祉センター建設工事開始

平成 10 年（1998）

- ・5月 長後駅南地下道完成
- ・「くらし・まちづくり会議“長後”」第1回全体集会
- ・10月 「かながわ・ゆめ国体」の炬火ランナー12名長後、湘南台地区走る
- ・長後駅ホーム延伸、エレベーター4基完成

平成 11 年（1999）

- ・3月 相模鉄道いずみ野線（いずみ中央—湘南台）開通
- ・4月 老人福祉センター「こぶし荘」開館（下土棚 800-1）、「いきがい福祉センター」併設
- ・6月 「こぶし荘」へのミニバス運行開始
- ・8月 29日 横浜市営地下鉄湘南台駅開業
- ・11月 「長後だより」30周年記念講演会、講師元NHKアナウンサー藤原尚武氏

平成 12 年（2000）

- ・2月 藤沢湘南台病院に無料シャトルバス運行
- ・4月 長後東口駅前広場、駅前通り線開通
- ・7月 「さくらんぼ児童クラブ」上高倉みどりの広場に開設（高倉 2259-4）
- ・引地川から高濃度のダイオキシン検出

平成 13 年（2001）

- ・4月 「長後地区整備促進委員会」発足
- ・4月 天満天神・諏訪明神、下土棚みどりの広場の一角に移転、建立
- ・7月 長後駅東口駐輪場完成
- ・11月 長後市民センター臨時駐車場隣に「うさぎ児童クラブ」開設（下土棚 524-1）
- ・12月 長後駅東口ロータリーへ降りる階段新設

平成 14 年（2002）

- ・長後西口駅前交番改築

平成 15 年（2003）

- ・5月 インターネットによる公民館使用申請開始
- ・7月 迷惑な看板やチラシをはがす有志が NHK 番組「難問解決！ご近所の底力」に出演
- ・11月 神奈川県藤沢土木事務所が違反屋外広告物除去協力員を募集

平成 16 年（2004）

- ・3月 「違法広告はずし隊」活動開始
- ・長後駅東口に「上谷戸第二公園」「上谷戸第三公園」新設
- ・青木一直さん新種ぶどう「宝寿」育種に成功

平成17年（2005）

- ・3月 「違法広告はずし隊」の活動NHKで放映
- ・6月 公民館使用有料化
- ・8月 横田夫妻、善然寺で講演「北朝鮮拉致を語る」
- ・横浜伊勢原線小田急高架下に歩行者、身障者、自転車用スロープ完成

平成18年（2006）

- ・6月 「長後谷戸公園」新設

平成19年（2007）

- ・下土棚遊水地（仮称）整備開始
- ・4月 ごみの戸別収集開始
- ・10月 ごみ処理有料化

平成20年（2008）

- ・上合地区の「長後憩いの森」（長後2756付近）に多目的トイレ設置

平成21年（2009）

- ・「長後地区地域経営会議」発足
- ・引地川に鮭遡上
- ・高倉の高飯橋架け替え

平成22年（2010）

- ・3月 「違法広告はずし隊」NHKの「ご近所の底力」に出演
- ・4月 「すまいる児童クラブ」開所（長後707）
- ・11月 「こぶし荘」への巡回バス「こぶし号」運行
- ・ピアゴ（元ユニー）閉店
- ・下土棚遊水地工事開始

平成23年（2011）

- ・長後産黒米小学校給食に使用
- ・「長後まつり」中止し、経費を東日本大震災の義援金に
- ・4月 長後地区包括支援センター市民センターに開設
- ・7月 長後駅西口広場拡張工事開始

平成24年（2012）

- ・特別養護老人ホーム「富士白苑」長後2722番地に開所
- ・4月 資源ごみ戸別収集開始
- ・「違法広告はずし隊」2012藤沢景観まちづくり賞受賞

平成25年（2013）

- ・下土棚の中村橋架け替え

平成26年（2014）

- ・4月 西口広場完成

平成27年（2015）

- ・3月 上高倉公園完成
 - ・4月 西口に自転車等駐輪場完成
 - ・11月 平成27年度神奈川県美化運動功労者の部で「長後花いっぱい運動推進委員会」表彰
 - ・11月 地域縁側事業の地域ささえあいセンター「yell」開所（高倉 650-30）
- 平成28年（2016）
- ・4月 児童クラブ「菜の花」（下土棚 524-1）開所
 - ・4月 「長後くらしサポートセンター」が長後地区ボランティアセンター「なごみ」として事業開始
 - ・5月 長後のゆるキャラ「さるてんくん」「長後まつり」に登場
 - ・10月 「おしゃべり大福」（下土棚みどり 238）、「七ツ木市民の家」で地域縁側事業開始
 - ・平成25年度健康検診のメタボリックシンドロームで長後地区は市内ワーストワン
 - ・11月 長後駅西口に綾瀬市コミュニティバス乗入
- 平成29年（2018）
- ・1月 シェアカフェ「長後食堂」に「子ども食堂」開店
 - ・3月 「長後だより」終刊

担当：清水茂代